

龍谷大学大宮図書館 二〇一七年度特別展観

# 物語る





龍谷大学大宮図書館 二〇一七年度特別展観

〜  
物  
語  
る  
〜

物語る

目次

特別展観の開催にあたって

図録

I 仏教にまつわる物語

1 釈迦御一代記図会

2 聖徳太子伝図会

3 三国七高僧伝図会

4 恵心僧都絵詞伝

5 法然上人行状画図

6 親鸞聖人絵伝

7 志んらんき(しらみ本) 浄土さんたん記并おはら問答

8 蓮如上人御一生記絵抄

9 蓮如上人御物語

10 日本国現報善悪霊異記

11 今昔物語集

12 発心集

13 沙石集

14 嵯峨光仏縁起

15 絵入りウイグル文『スターナ本生話』(大谷探検隊収集)

II 日本の物語

16 奈良絵本 竹取物語

17 伊勢物語

18 奈良絵本 大和物語

19 源氏物語

20 源氏画

21 奈良絵本 住よし物語

22 奈良絵巻 武家繁昌

23 伴大納言絵詞

24 平家物語

25 曾我物語

龍谷大学図書館長 新田光子

4 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31

26	奈良絵本 ふんしやう	32
27	奈良絵本 志賀物語	33
28	奈良絵本 大織冠	34
29	浦島太郎	35
30	日本永代蔵	36
31	絵本楠公記	37
32	絵本太閤記	38
33	絵本石山軍記	39
34	児雷也豪傑譚	40
35	JAPANESE FAIRY TALE SERIES(日本の昔噺)	41
Ⅲ 海外の物語		
36	奈良絵本 長恨歌	44
37	至治新刊全相平話三国志	45
38	絵本三国志	46
39	紅楼夢	47
40	金瓶梅	48
41	通俗忠義水滸伝	49
42	後水滸伝	50
43	ウイグル語インソップ伝	51
44	Wuthering Heights(嵐が丘)	52
45	Jane Eyre(ジェーン・エア)	53
46	The Tenant of Wildfell Hall(ワイルドフェル・ホールの住人)	54
47	The Pilgrim's Progress(天路歷程)	55
48	The Scarlet Letter(緋文字)	56
49	The Tales of Alhambra(アルハンブラ物語)	57
50	King Lear(リア王)	58

- ・ 展示順序は、図録の掲載順と異なる場合があります。
- ・ 展示資料のうち、参考展示など一部の資料については本図録に収録していません。

## 特別展観の開催にあたって

龍谷大学図書館長

新田 光子

龍谷大学図書館「二〇一七年度特別展観」は、「物語る」をテーマに開催いたします。

古代より、日常の営みのなかで、あるいは予期せぬできごとに遭遇した時に、人々が感じたさまざまな思いや喜怒哀楽は、多くの人の手を経て記録され、「物語り」として広く後世に語り伝えられてきました。それら「物語り」は、実在のできごとや人物の記録や伝記だけではなく、架空のはなし、小説、説話、絵本などを含む広いジャンルとして、人々に親しまれ、今に至っております。

龍谷大学では、これまでも図書館が所蔵している貴重な古典籍を特別展観として展示してまいりましたが、今回は、仏教の著名な説話をはじめとして、古今東西の人々が紡いできた「物語り」を紹介したいと思えます。

展示点数は限られていますが、民族や文化の多様性と独自性を実感することができると思えます。しかし、それ以上に重要なのは、世界中の人間に共通する想像力、表現力の素晴らしさということではないでしょうか。

そして、限られた時空間の中でそれを実感することを可能にするのが、まさに図書館であるという事実を、ご来場いただきました皆様には是非感じとっていただければと思います。

過去の日常の営みや事跡が巻物や冊子、書物をとおして私たちの日常につながっていく不思議さ、楽しさを存分に味わっていただくことができれば幸いです。

この展観開催にあたっては、文学部の木田知生先生、和田恭幸先生、松岡信哉先生はじめ、多くの大学関係者のお力をお借りしました。厚くお礼申し上げます。

なお、本学図書館ホームページでは、今回の展示作品を含め古典籍をデジタル画像として公開しておりますので、そちらもぜひご覧ください。

二〇一七年一〇月

I

仏教にまつわる物語



1 釈迦御一代記図会

六卷 六冊 山田意齋編 葛飾北齋画 天保二(一八四一)刊  
 縦二五・六×横一七・八cm  
 (請求記号 91365-35W-6)

本書は、釈迦如来の生涯を記した図会ものの伝書である。釈迦如来の生涯を五五の説話で物語っている。一般的な釈迦如来伝は、悟りを開く降魔成道までの半生に重点が置かれて語られるが、ここでは降魔成道以降の人生に重点が置かれて描かれている。編者の山田意齋(一七八八〜一八四六)は、読本作者であり、『観音経和訓図会』などいくつかの図会ものの伝書を手掛けている。

一方、挿絵は、浮世絵師として知られる葛飾北齋(一七六〇〜一八四九)が手掛けている。描いた三五図の内、日本で描かれた従来の釈迦如来伝の図と同じ説話の主題で描いた図は、三分の一度度であり、残りは、北齋自身が様々な典拠によって独自に描いた可能性が指摘されている。

本書が、刊行された天保年間、幕府の改革により出版物の統制が厳しくなる時期であり、出版差し止め等のリスクが少なく、一定の読者が確保できる高僧伝や仏典の注釈などの図会が多数出版された。その中で本書は、意齋・北齋とも晩年であったが、従来の釈迦如来伝と違った視点で描かれた点特徴的である。

釋史之贊曰太子生吾國醇厚之時孩孺神靈不慎本質鼓此癡朴之民鄉彼玄妙之法感應指搗疑惟自絕亦太子之善權其唐棣之尊乎不然者斯民不易覺也微太子吾道殆弗昭矣嗚呼南嶽導化之末標者東域佛法之根苗乎云云贊曰然乎哉乎

太子フ四

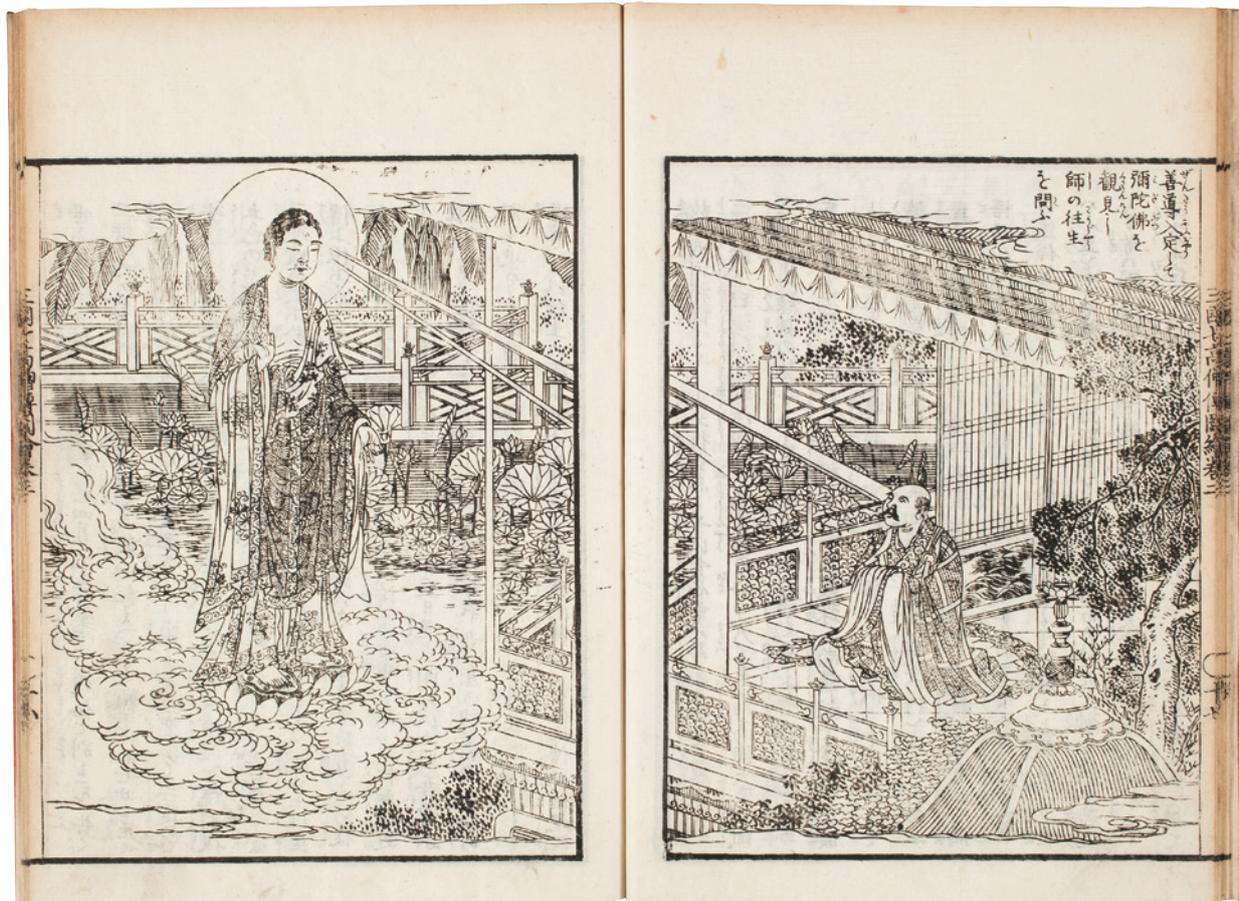


2 聖德太子伝図会

六卷 六冊 若林葛満作 西村中和画 享和四年(一八〇四)刊  
 縦二六・二×一八・二cm  
 (請求記号 024.98.357W-6)

聖德太子(五七四〜六二二)は、日本に仏教を取り入れた人物であり、後世には信仰の対象となった。ことに、浄土真宗の宗祖親鸞聖人(一一七三〜一二六三)をはじめとする高僧に影響を与え、現在でも厚く信仰されている。本書は、聖德太子の生涯を著した図会形式の仏書であり、近世初期以来広く流布した版本『聖德太子伝暦』などを典拠に作られている。

内容は、仏教説話を取り入れて、分かりやすく仏教の教えを広めるために作られた仏書と少し異なり、なるべく歴史的な事実に従った内容で聖德太子の生涯を著している。そのため、歴史的に不合理とされる事柄には訂正を加えている。

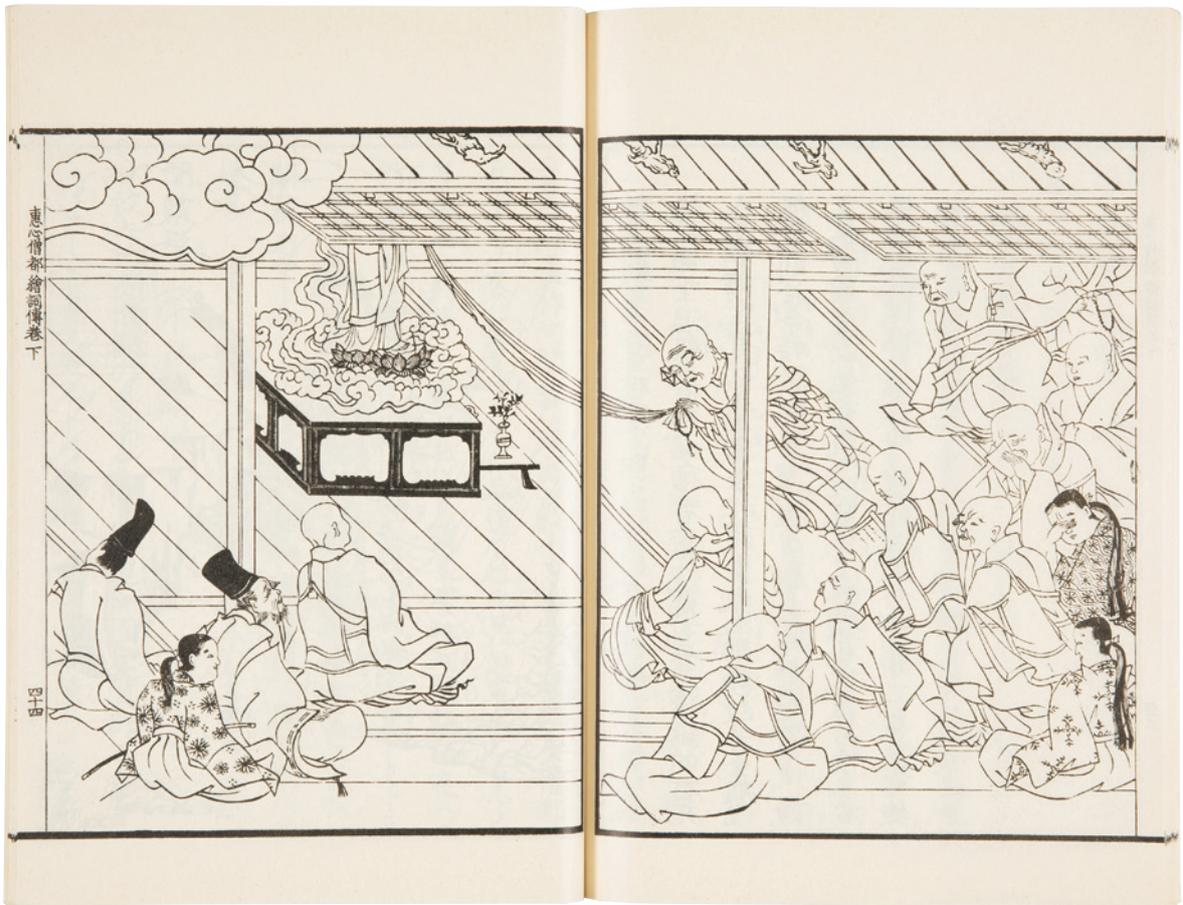


3  
さんごくしちこうぜんずえ  
三國七高僧伝図会

六卷 六冊 杓妃菴一禅編 松川半山(画) 万延元年(一八六〇)年刊  
縦二五・七×横一八・五cm  
(請求記号 296.2-1W-6)

七高僧とは、親鸞聖人が浄土教の祖師と定め尊崇された七人の高僧のことである。つまびらかには、龍樹菩薩(南天竺)、天親菩薩(北天竺)、曇鸞大師(中国)、道綽禅師(中国)、善導大師(中国)、源信和尚(日本)、源空上人(日本)である。

本書は、図会ものの仏書の中でも殊に挿絵が緻密で、なおかつ各冊の巻頭にはいわゆる巻頭繡像(登場人物を芝居の役者のようなポーズで描き、巻頭に据えた挿絵)のようなものが付けられている。内容はいたって真面目なもので、難解さをも感じさせるが、書物としての体裁は近世後期の通俗本の風を芬々とさせるものとなっている。最終の第六巻は附録の巻で、聖徳太子伝の巻となっている。これは、本堂の余間に七高僧と聖徳太子の絵像を奉懸する真宗寺院の風と真宗門徒の崇敬の念を掛酌した結果であろう。ただし、通俗本の領域でも太子伝はことに人気があり、近世前期から後期に至るまで、出版業界においても極めて重要なものの一つであった。



4

恵心僧都絵詞伝

三巻 三冊 法龍編 平成元年（一九八九）用慶応二年（一八六六）刊本複製  
 縦二七〇×横一九〇cm  
 （請求記号 296.5:881W-4）

慶応二年（一八六六）、台嶺前大僧正豪海が、源信僧都の八五〇年の遠忌に際して、追慕の心を込めて僧都の一代記を作り上げること発願し、これを受けた恵忍・堯道両師が、法龍に執筆を依頼し、成立したものである。臨終行儀のありさまを描くこの挿絵には、釈尊の入滅と同じく東北面西して遷化された僧都の姿が中央に描かれ、向かい合う仏像の左手より繋がれた五色の糸を手取ることで、仏に迎え取られ浄土へ導かれる様子が麗しく描かれている。当時の人々における浄土への思いが描き出されている。



5

法然上人行状画図

四八巻 二四冊 舜昌編 古碯画 元禄二三年(一七〇〇)刊  
 縦二七・一×横一八・九cm  
 (請求記号 296.5.15W.24 写字(白文庫))

法然上人(一一三三〜一二二二)が往生されて一〇〇年ほど後に、時の後伏見上皇の命により、舜昌(一二五五〜一三三五)が『法然上人行状画図』を編纂した。本書は全四八巻、二三五段の詞書と二二三の絵図により構成されていて、上人の誕生から嘉禄の法難、主要門弟の事績にまで及ぶ大部の内容の絵伝である。因みに、この絵伝の編纂の功績により、舜昌は、知恩院第九世の別当に任ぜられている。

本書は、成立してから間もなく周囲に知られるようになり、絵伝の書写や、内容の引用などが行われた。しかしながら、本格的に広まったのは、江戸時代に入って木版で刊行されてからであり、『法然上人行状画図』は、当時の学僧であった聞証(一六三四〜一六八八)の命により、義山(一六四八〜一七一七)と円智(生没年不明)が、絵伝の詞書の校訂を行い、狩野永納に師事した画僧古碯(一六五三〜一七一七)が絵を描いて刊行された。これにより、法然上人の事績は、一種の物語としても多くの人々に広く読まれるようになった。

## 親鸞聖人絵伝

四幅 文化七年(一八一〇)筆  
 縦一九三・〇×横八一・五cm  
 (請求記号 02.1.1824)



『絵伝』は、浄土真宗の開祖である親鸞聖人(一一七三～一二六三)の生涯を絵画で伝えたものであり、もともとは、詞書(ことばがき)と一緒であったが、いつしか別々になり、詞書は『御伝鈔』として拝読された。内容は、聖人の出家から、遷化、本廟創立までが、四幅の掛け軸に分けて描かれている。掛け軸には裏書きがあり、文化七年二月一九日に恵教が願主となって、第一九代本如宗主より授与されたものであることがわかり、本来は、山城国久世郡市田邑(現在の京都府久世郡久御山町)の光福寺の什物であったことが知られる。



〈志んらんき〉



〈浄土さんたん記并おはら問答〉

古浄瑠璃『しんらんき』は、親鸞聖人の生涯を初めて芸能・文芸の領域(浄瑠璃)で扱った作品である。その内容は、聖人の伝記を、初段の出生から六段の平太郎物語まで、六段に巧みに仕組み娯楽化したものである。この浄瑠璃は、正保五年(一六四八)頃まで興行されていたが、東本願寺からの訴えにより上演を禁じられた。当時の浄瑠璃太夫たちにとっては、そのようなリスクがあっても興行したいほどの魅力的な作品であったという。

なお、刷り文字の書体は、あたかも「しらみ」が蠢うごめいているように見えることから「しらみ本」ともいわれる。

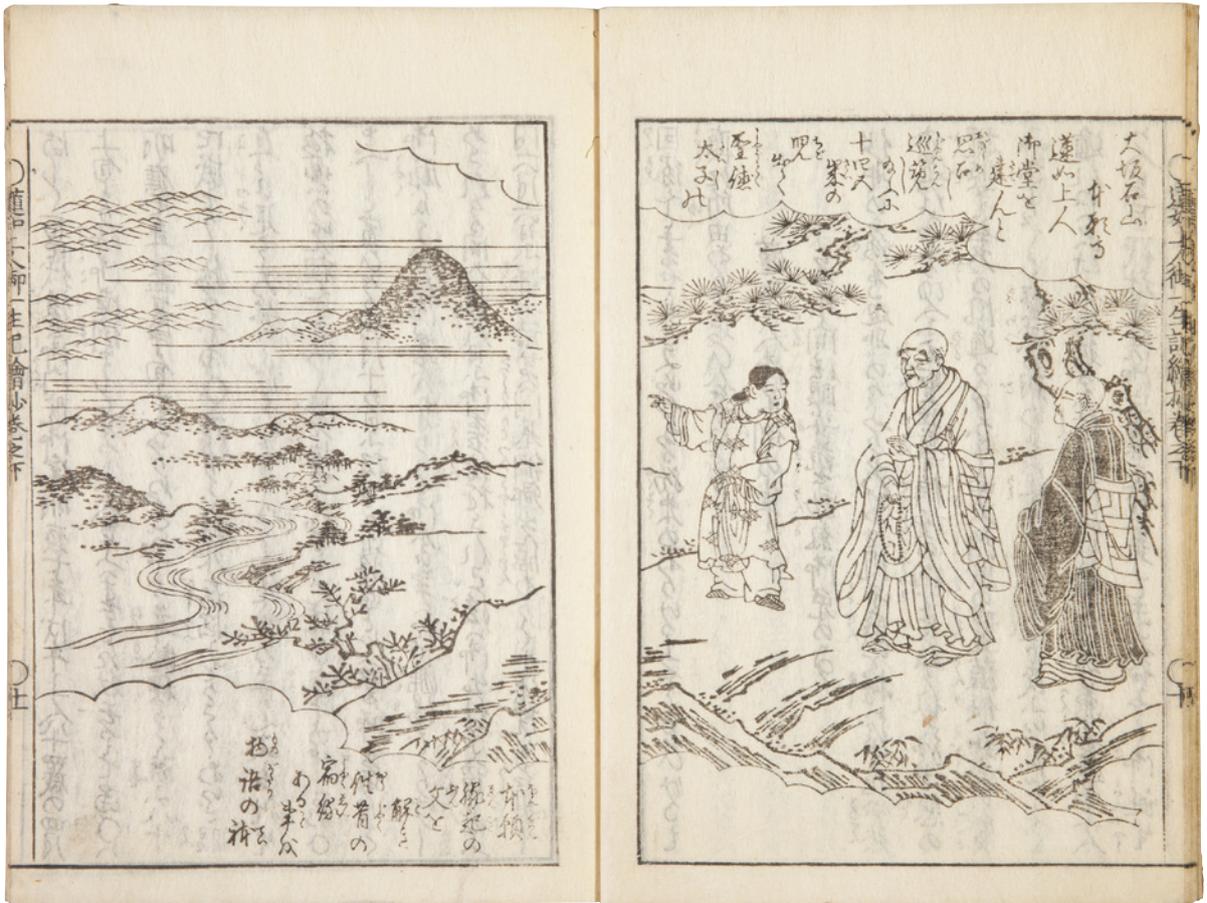
この後、寛文三年(一六六三)にも『志んらんき』が再び出版、上演されたが、またもや東本願寺からの訴えにより禁止されている。そこで、『浄土さんたん記并おはら問答』という浄瑠璃本が出版され、上演された。内容は五段に分かれ、タイトル・主人公を法然上人として、(親鸞聖人もの)ではないようにカモフラージュしながら、話の中心に「焼栗芽出」「川越名号」などの親鸞聖人の説話を引用したり、版心(柱)に「しんらん」と記すなど、(親鸞聖人もの)であることを読者に知らせている。

7

志んらんき(しらみ本)  
浄土さんたん記并おはら問答

二巻 一冊 寛文三年(一六六三)刊 縦一八六×横一三・四cm  
(請求記号 021.954.1)

二巻 一冊 江戸前期刊 縦二一八×横一六・三cm  
(請求記号 021.931.1)



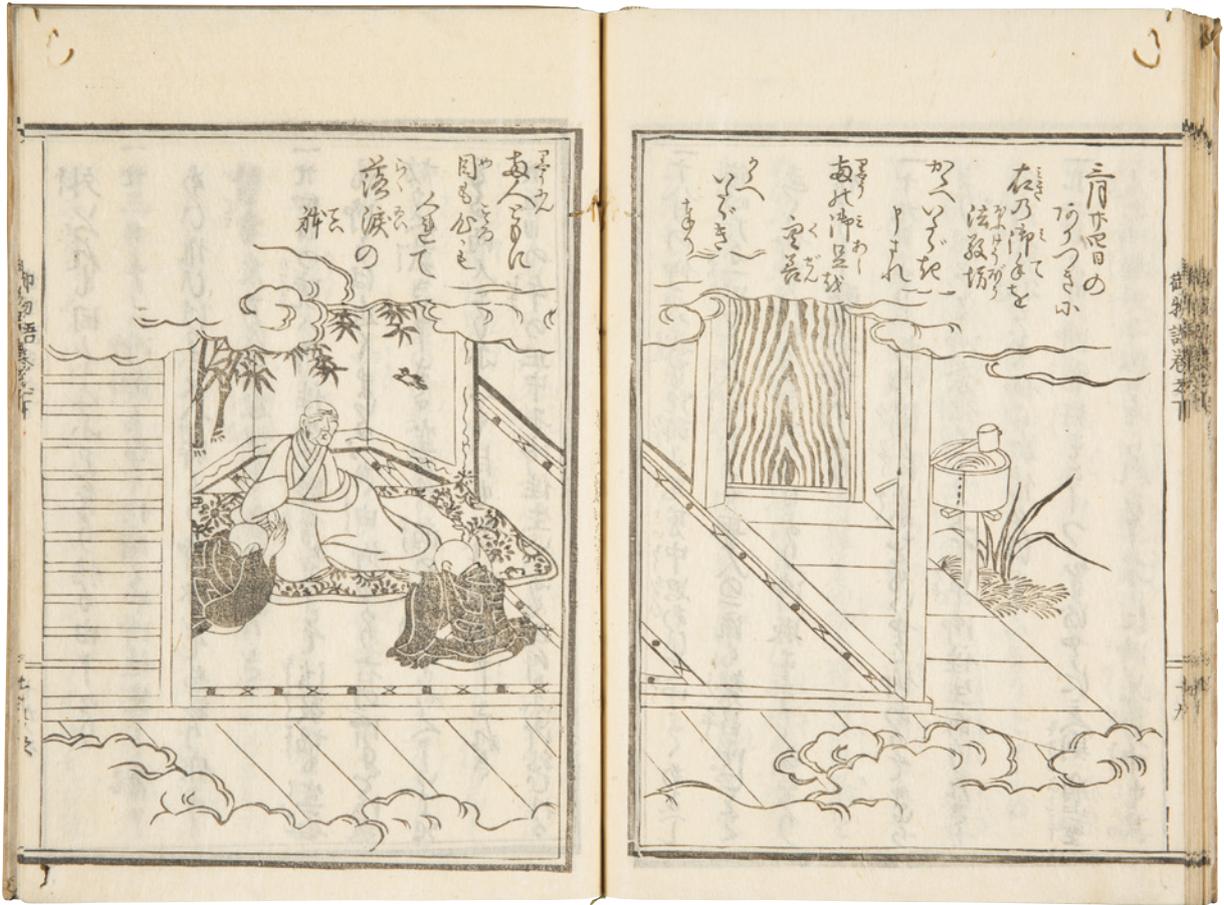
8

蓮如上人御一生記絵抄

三巻 三冊 粟津義圭著 文政二年(一八九二)刊  
 縦二・四×横一・五六cm  
 (請求記号 196.2.36W.3)

本書は、本願寺八代宗主蓮如上人(二四一五～一四九九)の生涯について、挿絵をまじえて記した庶民向けの平易な仏書である。その内容は、誕生、出家、比叡山衆徒の圧迫、吉崎御堂の建立、富樫一族の一揆、大坂(大阪)御堂の建立など、浄土真宗の再興に尽力された激動の生涯をさまざまな説話とともに記すものである。

本書に序文を添える粟津義圭(？～一七九九)は真宗大谷派の僧侶で、江戸時代中期を代表すべき通俗仏書の作者でもある。その著作物は本願寺派の菅原智洞と同様、長きにわたって庶民的な布教活動の領域で強い影響力を有した。江戸時代中期から、説教台本の版本が、刊行・販売されるようになったのであるが、義圭作の台本はことに優れたものであり、本書が刊行された頃にもたいそう有名でなおかつ人気のある僧侶であった。



9

蓮如上人御物語

二卷 一冊 安永九年(一七八〇)刊  
 縦二・五×横一五・八cm  
 (請求記号 1123.17W.1 写字台文庫)

上下二巻からなる。内容は、蓮如上人の誕生から往生、取骨、中陰に及ぶ上人の生涯を百二〇条に収めたものである。最後に山科本願寺と大坂御坊の記述がある。

もとの奥書として「天正八年九月中旬清書之」とあり、天正八年(一五八〇)に清書されている。本書には作者は記載されていないが、蓮如上人の一〇男で天正一一年に没する実悟(一四九二〜一五八三)の編集した『蓮如上人二期記』がもとになっていることがわかる。

日本霊異記一

○膳臣廣國地獄ニ墮テ蘿ル事

諾樂藥師寺僧景戒録

稱徳天皇ノ御宇ニ豊前國宮子郡ノ少領膳臣廣國ト云者慶雲二年九月十五日頓死シ三日ヲ經テ蘿リテ云我死スルト等シク一人ノ童子ト伴ヒユク路ニ大河アリ黄金ノ橋アリ橋ヲ渡リテ向フニ行ハ国アリ何レノ国ゾト問ハ南國ナリト答フ其所ニ金ノ宮アリ宮門ニ入テ見ルニ一人ノ王黄金ノ座ニ居タリ玉ワレヲ見テ云ク今汝ヲ呼ハ汝ガ妻ガ愁告

10

日本現報善惡靈異記

三卷 三冊 景戒録 正徳四年(一七一四)刊

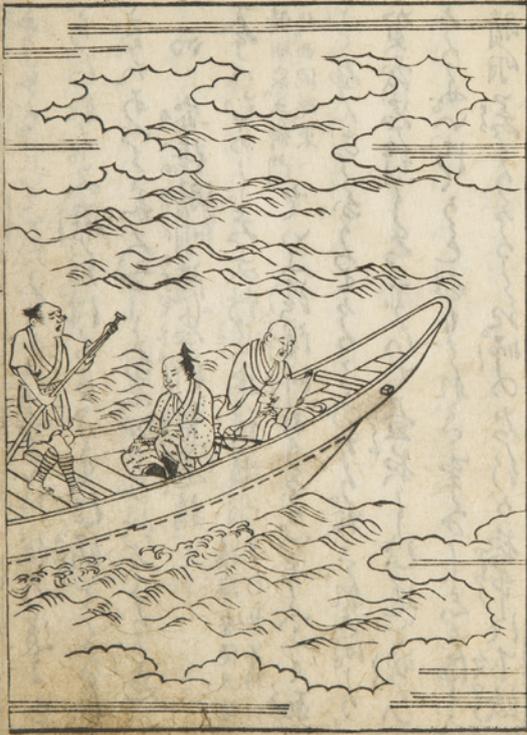
縦二六・五×横一七・六cm

(請求記号 022-736-3)

平安時代初期に薬師寺の僧景戒(生没年不詳)が著した仏教説話集である。『日本霊異記』の名称で呼ばれることが多い。雄略天皇から嵯峨天皇までの一一六の説話を三巻に分ち、上巻三五話、中巻四二話、下巻三九話で構成され、年代順に配列する。説話の多くは、善悪の応報を説く因果譚である。

説話の内部には、著者景戒の私度僧(国の許可を得ずに僧を称したものの)時代の布教体験が色濃く影を落としている。登場する人物は、庶民、役人から貴族、皇族に及び、僧も行基(六六八〜七四九)といった著名な高僧から貧しい僧侶まで登場する。また、下巻の三八話には、景戒自身が登場する説話がある。

現存するわが国最初の仏教説話集で、後の『今昔物語集』などに多大な影響を与えた。伝本には、真福寺本、興福寺本、前田家本、来迎院本などが伝えられている。



11  
今昔物語集 こんじゃくものがたりしゅう

三二卷(原欠第八・二八・二二卷) 一〇冊 享保一八年(一七三四)刊  
 縦二二五×横一五・九cm  
 (請求記号 913.37-34W-10)

平安時代後期に成立した説話集。天竺(インド)・震旦(中国)・本朝(日本)の三部に分かれている。標題のみ、あるいは標題と本文の一部のみの説話を含めて、一〇五九話を収める。編者は不詳であり、複数人の編者による共同編纂とする説、一人の編者による編纂とする説がある。内容は、各説話が「今は昔」という言葉から始まり、書名の由来となっている。舞台は、朝廷から辺境に及び、登場人物も王侯貴族、下層の老若男女、妖怪、動物など様々である。全ての説話に典拠となる資料があったようであり、『日本霊異記』などが主要な資料であったとされている。

天王寺聖隱德事 付尼食聖事

高野邊上人偽儲妻女事

義作守頭能家入求僧事

...

...

...

...

...

...

發心集第一

玄敏僧都直世返電車

昔玄敏僧都ト云人有ケリ山階寺ケムコトナキ

智者也ケト世ヲ賦心深シテ更ニ寺ノ來ヲコメ

三輪河ノホトリニ僅十ル草ノ菴ヲ結テテ思ツク住

ケリ桓武御門ノ御時此事聞食テ旌ニ食出テ

道ヘキ方ナクテナニ世ニ參ニケリサレドモ猶本意ナ

ラス思ヘルニヤ奈良ノ御門ノ御世王大僧都ニ成給

ケルヲ辭ニ申トテヨスル

三輪川ノ手早流トスキテレ衣ノ袖ヲ又ハケカサシ

12 發心集

八卷 八冊 鴨長明編 慶安四年(一六五二)刊  
縦三五・七×横一八・三cm  
〔請求記号 913.47.39W.8〕

鎌倉時代初期に成立した仏教説話集。編者は、随筆『方丈記』の作者として知られる鴨長明(一一五五～一二一六)である。「發心」とは、菩提心(悟りを求める心)を起すことであり、長明は、自分の心の儂く愚かなことを反省し、愚かな心を導くために深妙な法ではなく、身近な見聞を集め記したとある。

三巻本、五巻本、八巻本があり、一〇二の説話が収められている。内容は、名声が広まるのを嫌い遁世する僧侶の話や、現世への未練から往生に失敗した僧など様々であり、天竺(インド)、震旦(中国)の説話よりは本朝(日本)の説話に重点が置かれている。また、各話には、長明の感想が述べられている。後世の仏教説話集である『閑居友』をはじめ、長編の歴史文学『太平記』や日本三大随筆の一つである『徒然草』にまで影響を与えたとされている。

沙石集卷第四上

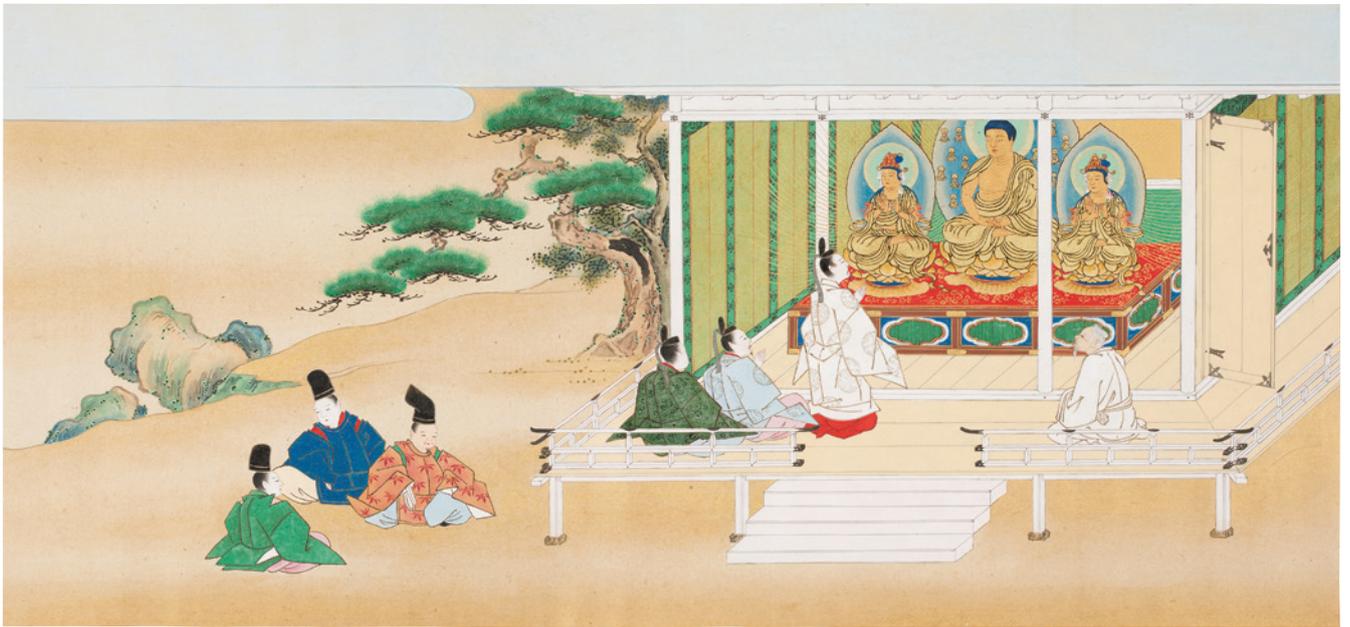
沙石集卷第四上  
無言上人事

或山寺ニ四人ノ上人有テリ。真如ノ離言ヲ觀シ。淨名ノ杜  
口ヲ學バントヤ思ケ。契ヲ結ビテ。道場ヲ在。嚴シ。萬縁ヲヤメ。三  
業ヲレツメテ。道場ニ入。四人座ヲ並ヘ。七日ノ無言ヲ始ム。承  
仕一人ツ出入シケル。コヽニ更タテ夜フテ。燈ノキエントスルヲ  
見テ。下座ノ僧。承仕火カキアゲヨトイフ。並ノ座ノ僧。無言道場  
ニ物申。様候ハズトイフ。第二座ノ僧。二人共ニ物云事。餘ニ心  
地惡ク覺テ物ニシルハシタウナトイフ。上座ノ老僧。様ハカハレド  
モ面々ニ物イフコト。アサレシク。モドカシク覺テ。法師ハカリツ。物ハ  
申サヌト云テ。ウチヲナツテケル。ガレコケニ。殊ニ。嗚呼カヽシクコツ  
覺テ。此事ヲ思フケハ。人コトニ此風情ノカシカタシ。世ノ間ニ人

13  
沙石集

一〇卷(存第三卷至一〇卷)八冊 無住道曉著 元和二年(一六一六)刊  
縦二八・七×横二〇・五cm  
(請求記号 021.84.8)

鎌倉時代中期に仮名交じり文で書かれた仏教説話集。当時、八宗兼  
学の碩学として知られた無住道曉(一二二七〜一三二二)が、説話を用い  
て庶民を正しい仏教理解に導くことを目的に著した書物である。説話は  
一五〇話前後収められており、弘安二年(一二七九)から同六年(一二八三)  
の間執筆された。その後も加筆され、異本が多く伝わっている。  
内容は、天竺(インド)、震旦(中国)、日本などの諸国の説話が題材と  
なっていて、諸仏の靈験の説話や高僧伝をはじめ、無住道曉自身の見聞  
を元に書いた諸国の事情などの説話なども収録されている。話の幅が広  
く、その他、滑稽譚や笑い話なども含まれていて、後世の狂言や落語に  
も影響を与えたとされている。



14

嵯峨光仏縁起

一巻 江戸時代後期写

縦二七七×横八四六・〇cm

〔請求記号 021.1-204-1〕

この縁起絵巻は、江戸後期に書写されたもので、巻末に江戸の釈海雲の識語がある。内容は嵯峨の寺院に安置された釈迦三尊像及び阿弥陀三尊像の縁起を絵巻物にしたものである。絵は五図あり、金泥彩色の精写画である。料紙は金霞引の美しい料紙を用いた卷子本である。

当該の「嵯峨光仏縁起」は近世後期の写本ではあるが、『国書総目録』には宮内庁書陵部の池底叢書に一本写本があることが報告されているのみである。その点で当該書は希少価値の高い縁起絵巻として貴重である。保存状態も良好である。



15

絵入りウイグル文  
『スダーナ本生話』(大谷探検隊収集)

二紙

縦二一〇×横三八・五cm

(流沙残闕 No166+167)

二〇世紀初頭仏教伝来のルートを探って中央アジアを調査した大谷探検隊が収集した資料の一つである。この資料は、ウイグル語の文章と絵による木版印刷本の一部である。内容は、過去と現在の因果関係を明らかにした仏教説話である本生話を題材としたものである。

布施の行を極端にまで強調した物語であり、奴隷に欲しいと乞うたバラモン(中央)が、スダーナ王子(左)から二人の実子を与えられ、その子らに縄をかけ引きたてる様子が描かれている。王子が愛情を殺して布施を敢行するという、この物語の中で最も涙を誘う場面である。

II

日本の物語











20

源<sup>げん</sup>  
氏<sup>じ</sup>  
画<sup>え</sup>

三卷 三冊 江戸時代後期写  
各縦三・〇×横三三・八・〇cm  
〔請求記号 021.1-188.3〕

江戸後期写。絹本、卷子装。『源氏物語』を絵画化したものであり、『源氏物語』の前半部にあたる桐壺巻から蓬生巻まで各帖一場面を描いたもので、一巻五図、三巻で合計一五図である。すやり霞に金箔を散らし、邸内の描写は吹き抜き屋台の技法が用いられ、色彩は濃厚で、繊細な描線が描かれているため、典雅で優艶な色調をたたえた開放感のある絵となっている。筆者の狩野探信(守道、一七八五〜一八三五)は、鍛冶橋狩野家の第七代で、父探牧の教えを受け、幕府奥絵師も務めている。



住吉物語は異本が多いが、伝本の分類を略本系・流布本系・中間  
 本系・広本系の四種に分ける立場によれば、本書は流布本系の本文を有  
 するものである。  
 物語の内容は典型的な継子物語で、継母が姫君の結婚を妨害するが、  
 最後は長谷寺観音の靈験により幸福な結婚生活をするというもの。挿絵  
 は上・中・下各五図ある。

21

奈良絵本 住よし物語

三帖 挿絵一五図 江戸初期写  
 縦三二×横一七・五cm  
 (講求記号 022-748-3)



22

奈良絵巻 武家繁昌

二巻 二冊 寛文・延宝(一六六一〜一六八一)頃写  
 縦三三〇×横二二〇〇cm(上巻)、縦三三〇×横二一七五〇cm(下巻)  
 (請求記号 021.1-203-2)

この奈良絵巻二巻は寛文・延宝(一六六一〜一六八一)頃の写本で、大形の長大な卷子本である。絵は上巻に六図、下巻に五図あり、金銀泥極彩色の画で、近世初期に描かれたものでありながら彩色等は劣化もなく、鮮やかである。本文料紙は鳥の子紙で、それに金泥で下絵を描いた上等なものである。本文は仮名主体で書かれ、漢字の部分は横に読みを付している。

本書の内容は文武二道をもって政を行うことが天下を治める要であることを説いたもので、上巻に唐国(中国)の黄帝から高祖に至る武勇について述べ、下巻で本朝(日本)の古代神話から鎌倉幕府源氏三代までの武勇について述べ、武家繁昌の歴史を辿ったものである。

当該の「武家繁昌」は版本がなく、奈良絵巻の卷子本と、奈良絵本の冊子本の形で伝わっている。国書総目録には学習院と大東急文庫及び横山重氏の個人蔵のもの三点が掲載されているが、その数は少なく、写本も寛文より前のものは報告されていない。

当該の卷子本二巻は伝本が少ない上、近世初期の寛文・延宝頃の写本で、しかも大形の堂々としたものであり、絵の状態も良好な点で貴重である。



23

伴大納言絵詞

三卷 伝常磐光長作 江戸時代写  
 縦三八五×横八四二・二cm(上巻)、縦三八・八×横八七五・五cm(中巻)  
 縦三八五×横九五〇・二cm(下巻)  
 (請求記号 022.1-206-3)

平安時代末期に成立した絵巻物である。貞観八年(八六六)に起きた応天門の火災を発端とする応天門の変を題材にしている。大納言伴善男が左大臣源信を陥れようと陰謀を画策し、やがてそれが露見し、失脚するまでの過程を絵巻物語として伝えている。

作者は、常磐光長(生没年未詳)とされ、時の後白河法皇(一一二七-一一九二)が『年中行事絵巻』とともに描かせたと云われている。平安時代の人々を描いた絵巻として優れており、史料としての価値も評価されている。『源氏物語絵巻』などと並び、四大絵巻物の一つに数えられている。

二冊 室町時代写 縦二八〇×二二・五  
講求記号 021-332-12

平家の栄華と没落を描き、「祇園精舎の鐘の声…」の書き出しで知られる『平家物語』は中世前期に成立して以来、広く愛読され、語り継がれてきた日本文学を代表する作品である。後世への影響も大きく、同じジャンルの軍記物語をはじめ諸作品に影響を与えている。

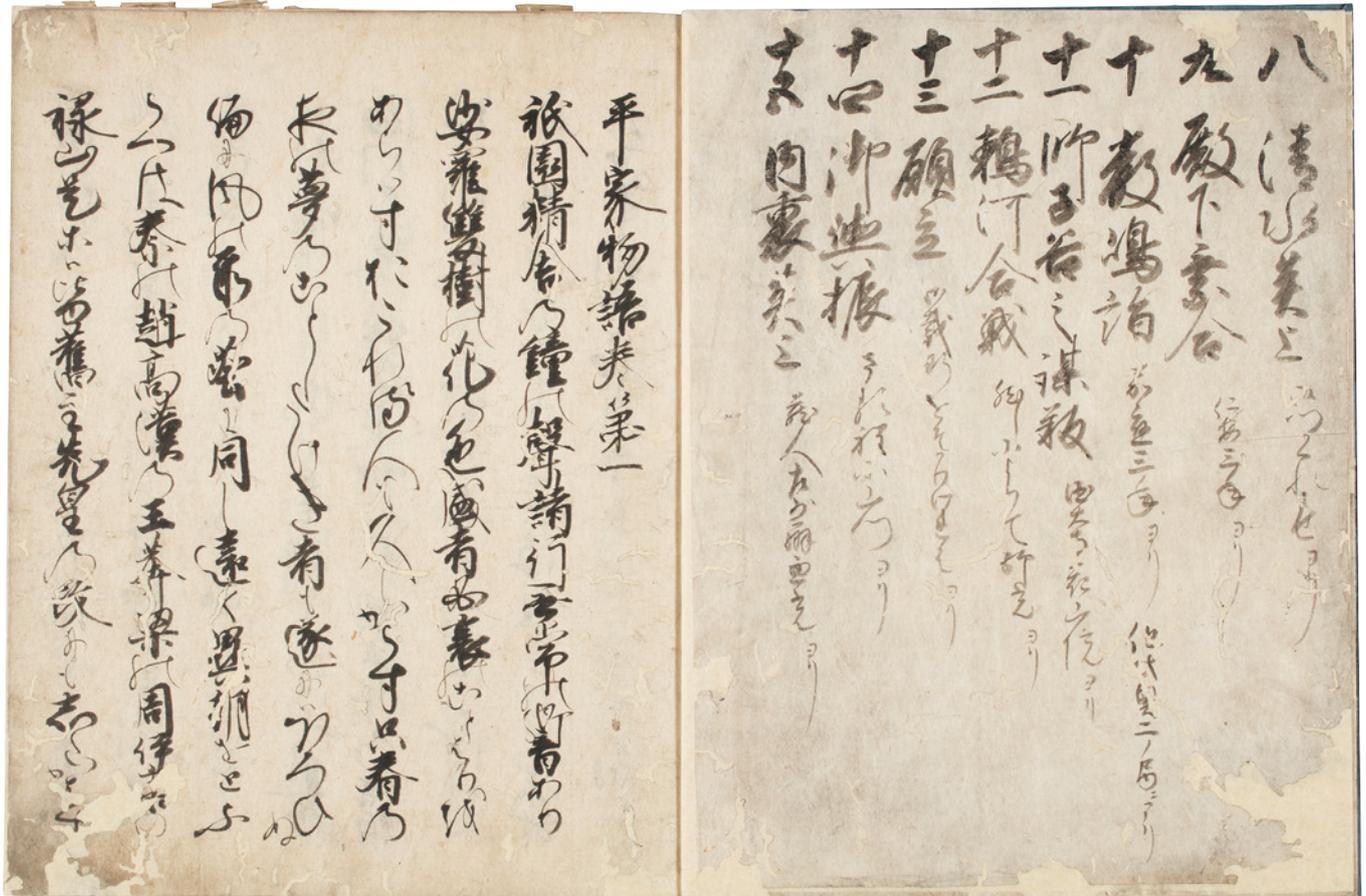
その原作者については多くの説があり、最古のものは兼好法師の『徒然草』のなかに、信濃前司行長なる人物が作者であると記されている。行長は、鎌倉時代初期、関白・九条兼実に使っていた家司ではないかと推定される。

原本はすでにないが、書写された多くの諸本が現存。大きくは盲目の琵琶法師が琵琶をかき鳴らしながら語るときに台本となる「語り本系」と、読み物として語り本系よりも分量の多い「読み本系」の二系統に分かれる。さらに語り本系統の諸本は流派の別から、一方流諸本と八坂流諸本とに区別される。

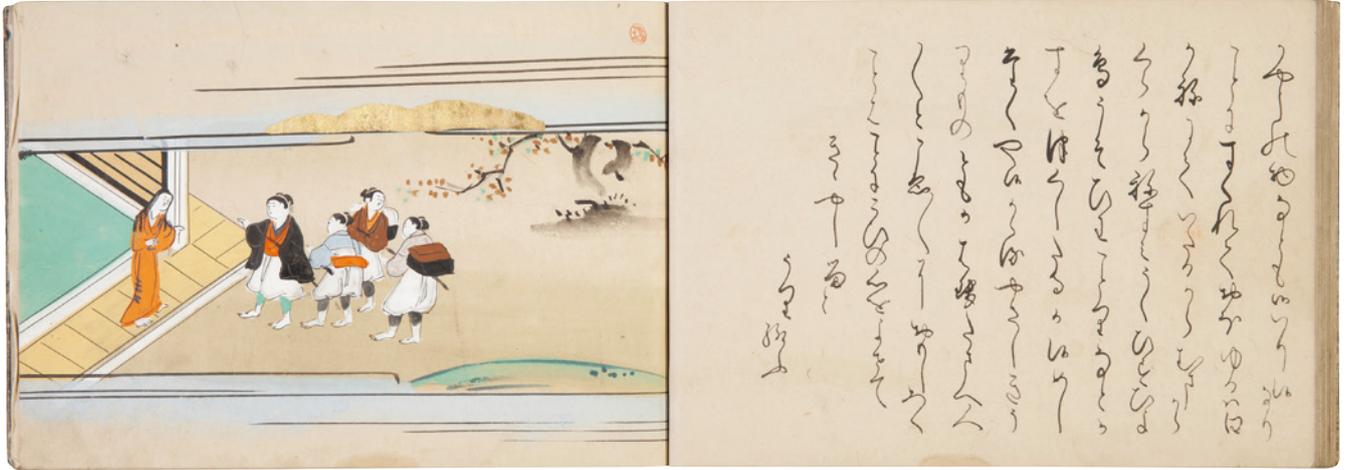
龍谷大学本は、語り本系一方流の覚一本である。覚一本は南北朝期の代表的な琵琶法師・覚一が応安四年(一三七一)、当流の証本として書き遺した伝本であり、奥書に覚一という署名が見える。

なお、龍谷大学本には、同じ覚一系の高野本(東京大学国語研究室蔵)にある「祇王の巻」と「小宰相の巻」がない。その理由としては、同本が最古の覚一本であり、二つの巻は後から創り出されて付加されたことにあると推測される。

このことから、龍谷大学本は覚一系のなかでも最も古い写本として重視されてきた。加えて文学的にも完成された伝本と言われ、日本古典文学大系『平家物語』(岩波書店)の底本として使用されている。







26

奈良絵本 ふんしやう

存上・中二冊 挿絵一〇図 江戸時代写

縦一五・八×横三三・〇㎢

〔請求記号 022-487-2〕

当該本は横本の奈良絵本。もともと三冊本であったが、下巻を欠いている。「ふんしやう」「ぶんせう」「ぶんしやう物語」「文正草子」などさまざまな名称で呼ばれている。お伽草子の中でも最も伝本の多い作品とされる。

内容は、大宮司に仕えていた男が主人から暇を言いわたされるが、その後製塩で成功して長者になるという、極めてめでたい立身出世を主題とした物語である。そうしたことから、この草子は「祝の草子」とも「めでた物語」とも呼ばれ、正月の子女の読書初めに用いられていた。

当該本の料紙は間似合紙。針目安(針見当)を存す。



志賀物語  
 一巻  
 江戸初期写  
 縦一六・八×横二四・三  
 〔請求記号 022-747.1〕

27

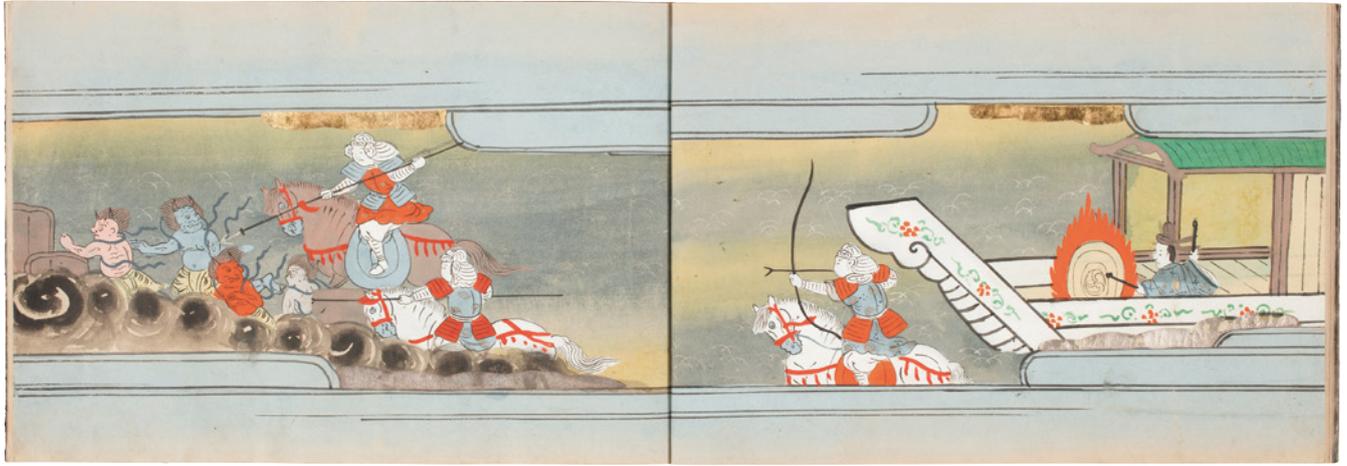
奈良絵本 志賀物語

一冊 江戸初期写  
 縦一六・八×横二四・三  
 〔請求記号 022-747.1〕

当該本は、奈良絵本で、挿絵は五図である。表紙は紺地に金泥で秋草模様、表見返しは菱形模様の銀紙。外題は、金泥秋草模様の朱の題簽に「志賀物語下」と墨書してある。挿絵は、すやり霞の雲形を絵の天地に配しているのは他の奈良絵本と同様である。絵は素朴なもので単純な構造の中に淡彩の顔料を用いているが、金泥を用いている箇所もある。

本書は本来上下二冊であるが、上巻は失われている。本書以外に、東京大学・金刀比羅宮図書館に完本が存し、いずれも奈良絵本として伝存する（『古典文庫』所収久原本は伝存不明）。

内容は、堀川中納言の姫君と深い契りを結んでいた大納言の御子の少将が、大臣家に取り込まれて帰れなくなり、姫は少将の心変わりを恨んで志賀に身を隠し、若宮を産んで死ぬ。少将は後に姫の死を知り、菩提を弔い、若君は出世して大将となるというもの。



28

奈良絵本 大織冠

三冊 紙本極彩色一三図 江戸前期写

縦一五・五×横三三・〇cm

(請求記号 021・593・3)

表紙は紺色地に金泥で花・蝶・木が描かれており、中央に橙色題簽で「大しよくはん 上」の如き外題がある。見返しは銀箔が貼られ、型押し唐草模様がある。内題・奥書は無い。極彩色画一三図。本文は毎半葉一三行、毎行一二〜一四字程度の漢字交じりの平仮名文で書かれており、若干の誤脱や衍を除いて刊本の「舞の本」とほぼ一致するが、中冊の本文には、書写もれか脱落が一箇所見受けられる。

挿絵は典型的な奈良絵で、霞に一部金銀箔を用いている。およそ近世前期頃に写されたものであろう。剥落等は殆どなく、保存状態は良好である。

内容は、中国から送られた宝珠が瀬戸内海で龍に奪われ、大織冠藤原鎌足が海女と契って、その海女に宝珠を取り返させる玉取り伝説である。



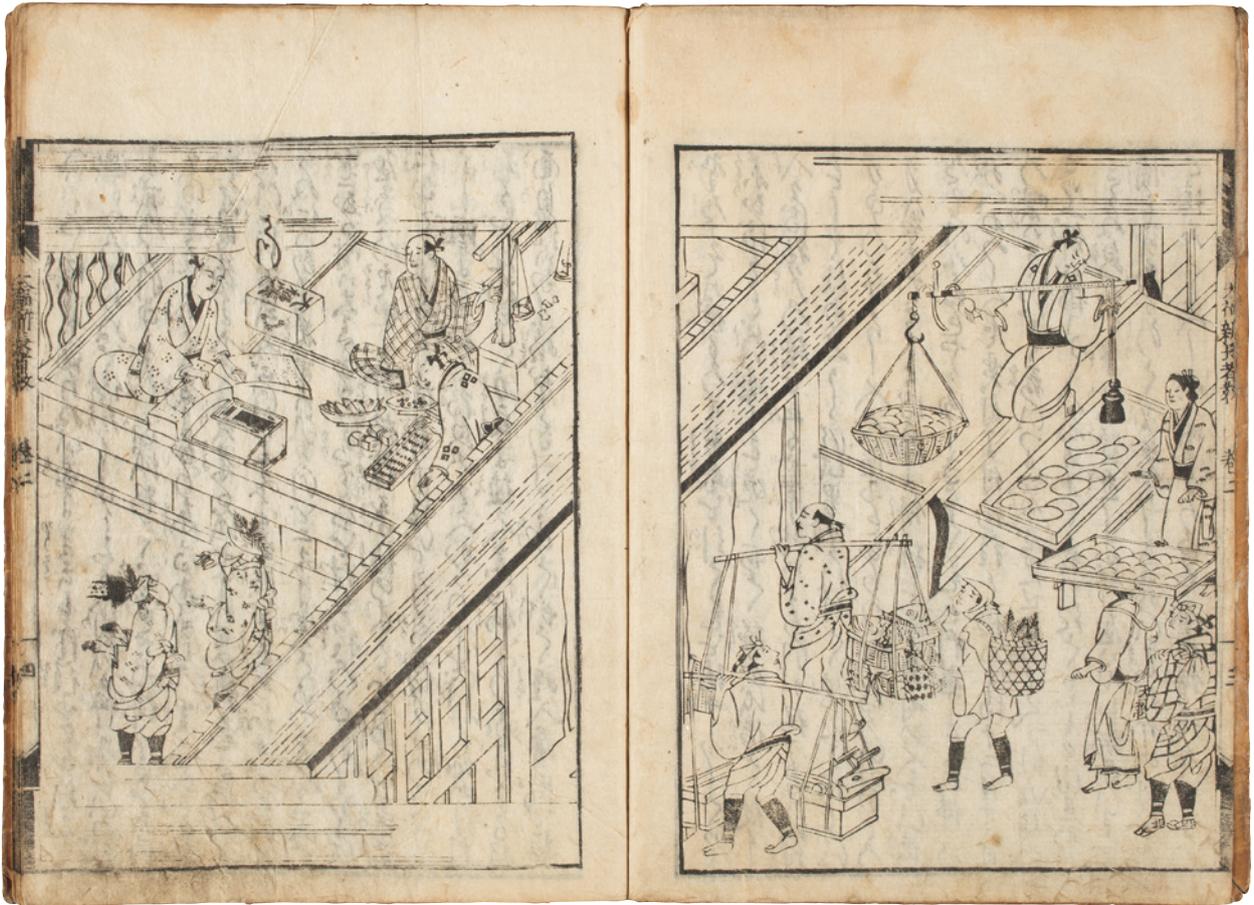
29

浦島太郎

一卷 延宝・貞享頃（一六七三〜一六八七）写  
 縦二一・五×横一三六五・〇<sub>三</sub>  
 （請求記号 021.1.206.1）

「浦島太郎」は、御伽草子として最も親しまれた物語の一つとして、文学史上の意義が大きい。本資料は、「浦島太郎」の絵巻である。本文は多少異同があるものの、澁川版御伽文庫本とほぼ同じ内容である。『日本書紀』などに見える浦島説話に比べ、亀の報恩講と浦島明神の本地譚を強調している点に、御伽草子らしい中世的な特徴がある。

全部で八回ある挿画は、金銀泥を用いて繊細な箇所まで丁寧に描かれており、中国風に描かれた竜宮城など描写に面白さがある。また、料紙は金泥で草花の下絵を施していて、そこに流麗な筆跡で本文が描かれており、華やかさを有している。



30

日本永代蔵

六卷 六冊 井原西鶴著 貞享五年（一六八八）刊  
 縦二四・九×横一七・六cm  
 （請求記号 913.52・28W-6）

井原西鶴（一六四二～一六九三）の代表作品の一つで、町人物三部作の『日本永代蔵』『西鶴織留』『世間胸算用』の第一作が本書である。京・大坂・江戸を中心に、諸都市の町人の興亡盛衰談を収める。また、本作品には、町人物のすべてにわたる西鶴の思想が示されている。

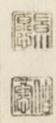
本作品は、話の面白さと町人道の教訓性から、江戸時代を通して多くの読者を得ており、従って異版も多く、また摺出しも多数で、版面の磨滅が甚だしいものがある。当該本も磨滅の箇所が部分的にあるが、摺りはおおむね良好である。



藤吉郎像賛

公未出世喪乾坤天生雄傑夢兆朝  
將耀其照以破昧昏儀表殊異面貌類猿  
迹多可議德協彼元用兵如鉅芟彼凶頑  
忽擢卒伍俄主大藩視之其末尚是泥蟠

平安皆川急謹題



木下藤吉郎像

32

絵本太閤記

六編七二巻 七二冊 武内確斎著 岡田玉山画  
寛政九年(一七九七)〜享和元年(一八〇二)刊  
縦二二・五×横一五・七cm  
〔請求記号 913.65-19W-72 写字台文庫〕

文章の読みやすさと絵の面白さから、江戸時代後期の大衆に、豊臣秀吉伝説を定着させた物語である。当時の民衆は、内容の真偽を判断する手段が他になかったため、伝説というよりも、むしろ真実として、豊臣秀吉が大衆化されていったに違いない。

『絵本太閤記』が完成した二年後の文化元年(一八〇四)に、豊臣氏関係の出版統制により、幕府から絶版命令が出されている。秀吉を主人公にした場合、家康は豊臣家からの政権を奪った人物として描かれてしまふなど、東照大権現として神格化されている開幕の祖、家康の威信を堅持できなくなるためであった。



33  
 えほんいしやまぐんき  
 絵本石山軍記

初編一〇巻一〇冊 二編一〇巻一〇冊 三編一〇巻一〇冊  
 土屋正義編 初編明治一四年(一八八二)刊 二編 三編明治一六年  
 (一八八三)刊  
 縦二・四×横一・五・七cm  
 (請求記号 913.65-66W-30)

本書は、江戸時代に成立した『石山軍鑑』を絵本読本の形式に改作した明治時代の娯楽的な読み物である。『石山軍鑑』は、江戸時代中期の明和年間(一七六四～一七七二)頃に立耳軒によって書かれた実録体小説で、写本で流布した。一方、絵本読本とは、近世後期に流行した娯楽小説の一ジャンルで、その名のとおり挿絵を多用した娯楽小説のことである。

本書は、明治一四年から一六年にかけて刊行され、初編・二編・三編の全三〇冊で構成される。編輯者は土屋正義。内容は、織田信長と本願寺との間で十余年にわたり繰り広げられた石山合戦の顛末を描くものである。

『石山軍鑑』が成立した江戸時代中期は、おりしも浄土真宗の説教が隆盛に向かった時期であるが、本書の刊行された明治時代はその欄熟期に相当し、「石山軍記」の説教台本が活版本で刊行されていた。



34

児雷也豪傑譚

五七冊 美図垣笑顔・一筆庵主人他作  
 香蝶楼(歌川)国貞・国輝・国芳他画 江戸時代刊  
 縦一八〇×横一一〇cm  
 (請求記号: 913.58:9W:57)

本書は、中国・宋の説話集『諧史』に想を得た読本『自来也説話』を模倣した伝奇長編である。四三編(未完)の合巻で、江戸の和泉屋市兵衛によって刊行された。合巻とは、江戸後期の草双紙の一種で、伝奇性と娯楽性の濃い絵画小説版本である。

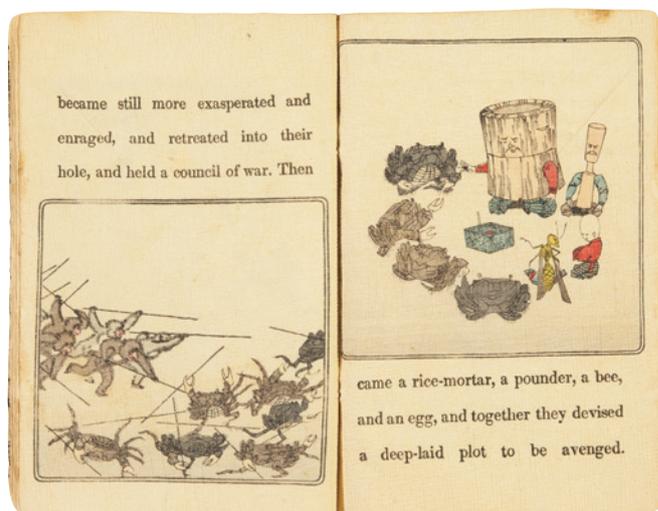
本書は美図垣笑顔をはじめ、複数の作者による副作であることから、作柄に変化を見せて展開する特徴を持つ。

内容は、主人公の児雷也が蝦蟇の精霊道士から妖術を授かり、悪人や妖怪を討つ英雄的義賊として活躍するというものである。好評を得て大いに流行した本作は阿竹黙阿弥によって劇化され、嘉永五年(一八五二)、歌舞伎『児雷也豪傑譚話』が江戸の河原崎座で上演された。

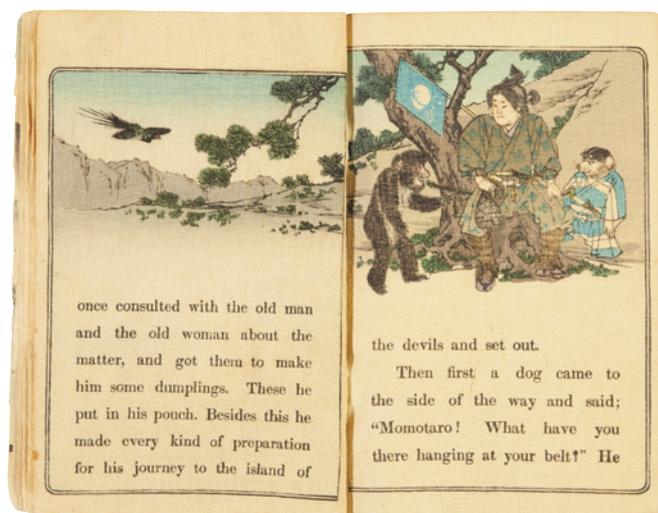
その後、人気役者の主演が更なる評判を呼び、双六や錦絵が多く製作された。また、明治時代には、歌舞伎の粗筋をまとめた二〇丁の合巻も刊行された。出版と芝居の興行が影響し合い、密接な相互関係を見せた作品であると言えるだろう。



〈独語版 舌切雀〉



〈英語版 猿蟹合戦〉



〈英語版 桃太郎〉

本書は「縮緬本」といわれる、和紙に活字を印刷し、織物の縮緬と同様な感触になるように特殊加工して作られた小冊子である。寛政の前後より大正の頃まで流行した。なかでも東京の長谷川武次郎の欧文縮緬本などはその典型的なものである。

『JAPANESE FAIRY TALE SERIES』は、桃太郎、舌切雀、猿蟹合戦、花咲爺、かちかちやま等、日本の昔噺を英文にし、美しい色彩で描いている。英文以外にもドイツ語本もあり貴重である。

明治以降、日本の昔噺・詩歌や風俗などが、居留外国人の手で欧州語に翻訳された。そして、色摺木版の挿絵をほどこした軽装本が、外国人観光客に人気の高い土産物となった。欧米の子供用絵本にラグブックと呼ばれる布製の絵本があるが、縮緬本も本物の布に摺られた絵本だと思いい、本国の子どもへのプレゼントに買われたこともあったらしい。その製法は、平摺りした木版画を芯に巻いて圧力をかけ縮緬布風に縮めた特殊な技法であり、長谷川武次郎がこれを一手に手掛けた。英語のみならず仏・独・蘭・西語などの版が刊行されたことから、国際的に人気があったことがうかがえる。

35

**JAPANESE FAIRY  
TALE SERIES** (日本の昔噺)

明治一八年至二年(一八八五〜一八八九)刊  
 縦一五・二×横一〇・五cm 縦一八・二×横一一・三cm  
 (縮小記号) 022-682-1,2,3 022-757-1,2,3)



III

海外の物語

三冊 寛文・延宝(一六六一〜一六八一)頃写  
 縦一六・五×横二四・三cm  
 (請求記号 021・587.3)



源氏物語の長恨歌

よも、ひびきつるもたえ  
 しの、ひびきつるもたえ  
 あり、あやしあやしあや  
 とあり、あやしあやしあや  
 うゆれ、あやしあやしあや  
 ひと、あやしあやしあや  
 す、あやしあやしあや  
 春は、あやしあやしあや  
 春は、あやしあやしあや  
 春は、あやしあやしあや  
 春は、あやしあやしあや  
 春は、あやしあやしあや  
 春は、あやしあやしあや

『長恨歌』は唐の詩人白樂天による長篇叙事詩で、玄宗皇帝と楊貴妃の悲恋を伝えるものとして広く知られている。日本では平安時代から親しまれ、江戸時代には狩野派の絵師によって豪華な絵巻物が製作されたり、あるいは『長恨歌図抄』(延宝五年(一六七七)跋)のような絵入版本が刊行されたりした。『源氏物語』の桐壺巻は『長恨歌』を翻案した物語ともいわれるなど、日本文学・文化に与えた影響は大きい。

当該本は、寛文・延宝頃に作成された奈良絵本で、上巻の首に「長恨歌」の由来を仮名文で記した序があり、以下詩句を一節ずつあげ、その釈文を添えている。

表紙は紺色地の金泥下絵表紙、題籤は藍色地に金泥下絵をあしらひ、表紙中央に貼られている(原題籤「ちやうこんか上(中・下)」。上巻は、紙数二九丁、挿絵五図(その内、見開きは一図)。中巻は、三三丁、挿絵五図。下巻は、二八丁、挿絵四図。料紙は間似合紙。

古い時代に「長恨歌」を絵巻や奈良絵本化したものは現在全く伝わっておらず、現存している本はすべて江戸時代に入ってからのもので、その数も極めて少ない。





38

絵本三国志

一〇卷(欠第六卷) 九冊 桂源吾宗信画 天明八年(一七八八)刊  
 縦二・八×横一六・〇cm  
 (請求記号 913.65.25W.9 写本台文庫)

中国の三国時代を扱った『三国志演義』の有名なエピソードを項目別に記した本。項目ごとに、エピソードのシーンが描かれている。掲載頁は、『三国志演義』の名場面の一つである桃園の誓いを描いたものである。左側の人物が劉備であり、右側が関羽と張飛である。三人はこの誓いにより義兄弟の契りを結んで生死を共にする宣言を行ない、その後、三国の一つである蜀を建国するのである。

石耶玉耶頌耶靈耶乾  
 瑞坤兒鑄爾形耶癡海  
 情天鍊爾神耶來無始  
 去無終耶渺二茫二否  
 安窮耶



39

紅樓夢

一一〇回 二四冊 清曹雪芹(名は霽)著 清高鶚續 乾隆五六年  
 (二七九)序 刊本  
 縦一八・七×横一一・六cm  
 (請求記号 923.64W.24)

一八世紀、中国の清の時代に作られた口語体の長編小説である。全  
 一二〇回から成り、前八〇回が曹雪芹の作、後四〇回が高鶚の続作であ  
 る。中国の元代から明代に書かれた口語体の長編小説である『三国志演  
 義』『水滸伝』『西遊記』と合わせて「中国四大名著」とも呼ばれている。  
 内容は、主人公である賈宝玉と、従妹で詩才と機知に富みプライドの  
 高い林黛玉、従姉で良妻賢母型の薛宝釵の三人を中心に展開する悲恋の  
 小説である。上流階級の生活や主人公たちの交情が細かく記されており  
 り、現代に至るまで多くの人々に愛読され、中国では、映画やドラマが  
 何作か製作されている。

金瓶梅

兩段文字。却兩番夾寫。如王姑子。問月娘喜事一段。下夾瓶兒希寵一段。又寫王姑薛去一段。又夾金蓮粧丫鬟一段也。章法井井不紊。未必寫盡諸色衣服。照人雙目。蓋預爲聯姻。肯當出其地也。

第四十回

抱孩童瓶兒希寵 粧了髮金蓮市愛

詞曰

種草蓋田玉一株。看來的七河人。娘多方珍重好。支替掌中珠。伴僧畏驚新態變。妖嬈偏與舊時殊。相逢一見笑成癡。少人知。

右調山花子

話說當夜月娘和王姑子一炕睡。王姑子因問月娘你老人家怎的就沒見點喜事兒。月娘道。又說喜事哩。前日八月初八日。因買了對過喬大戶房子。平白俺每都過去看。上他

第一奇書

第四十回

一〇〇回(存第三九回至第五〇回 第七六回至七八回 第八四回至第一〇〇回) 二冊 明笑笑生著 清張竹坡評 清代刊  
縱二四・七×橫一六・〇cm  
〔請求記号 923・15W・2 写字台文庫〕

明代の万暦年間(一五七三〜一六二〇)に成立したとされる口語体の長編小説であり、『三国志演義』『水滸伝』『西遊記』と合わせて「四大奇書」(「中国四大名著」とも呼ばれる)とされる。著者について、笑笑生が著したとされているが、本名や生没年は不詳であり、著名な作品にも拘らず、『金瓶梅』の実像は分かっていない。

内容は、『水滸伝』に見える西門慶と潘金蓮の密通のエピソードを題材にしており、山東の豪商西門慶が、あらゆる手段により富と権力を手に入れ、色欲と金欲にふけるが、淫薬を飲んで急死し、一家が離散していく話である。話の内容から、度々発禁処分を受けた作品であるが、当時の社会風俗を浮き彫りにし、人間の欲望を赤裸々に描いており、社会的な小説の一面もあり、中国だけではなく、日本でも読まれていた。ちなみに、本資料は、西本願寺歴代宗主の蔵書である「写字台文庫」に収められていたが、大部分が散逸し、全体の三分の一程度が現存している。

通俗忠義水滸傳

草澤奸雄  
學究家風各供稿  
為尋章豈是

輔佐時危  
世治廟廊

智多星吳用



出九紋龍  
師授由王進  
端人取必端  
斯言合益信

九紋龍史進



41

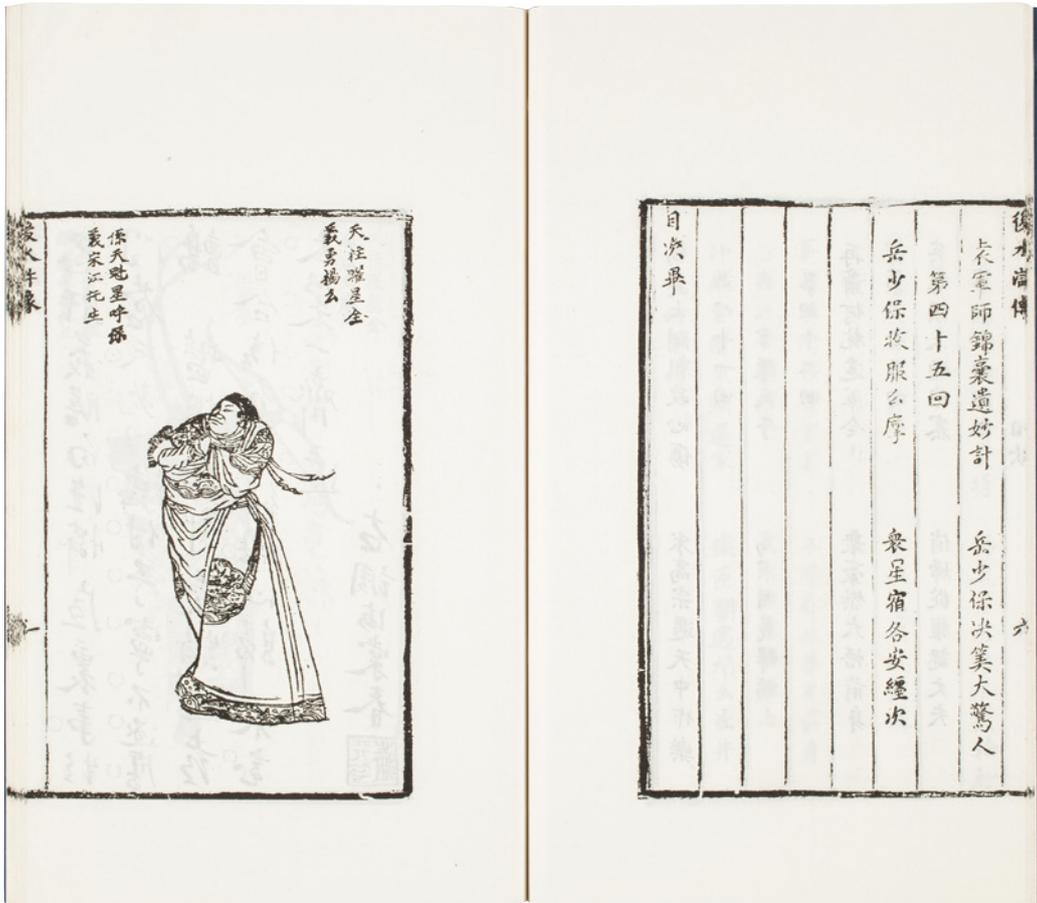
### 通俗忠義水滸傳

四七卷(欠卷第四五卷至第四七卷) 六〇冊 岡島冠山編訳  
上編宝曆七年(一七五七)刊 中編安永元年(一七七二)刊  
下編天明四年(一七八四)刊  
縦二六〇×横一八・四cm  
〔請求記号 923.19W.00 写字台文庫〕

中国の長編口語体小説であり、「中国四大名著」の一つである『水滸傳』は、北宋時代末を舞台として、様々な事情により世間からはじき出された一〇八人の好漢が、梁山泊に集結し、悪徳官吏を倒して国を救うことを目指す内容から、一般民衆を中心に人気を博した。

日本には、江戸時代に入ってきており、儒学者の岡島冠山(一六七四〜一七二八)が訓点翻刻や和訳を行った。本資料は、その内の和訳であり、冠山の遺稿を刊行したものである。

『通俗忠義水滸傳』の刊行をきっかけとして、以降、中国の口語体で書かれた小説が翻訳・翻案されることが流行した。



後水滸傳

衣軍師錦囊遺妙計

岳少保決笑大驚人

第四十五回

岳少保收服么摩

衆星宿各安經次

目次畢

岳少保呼孫  
爰采江托生



天注羅星全  
義勇揚么

後水滸傳

42

後水滸傳

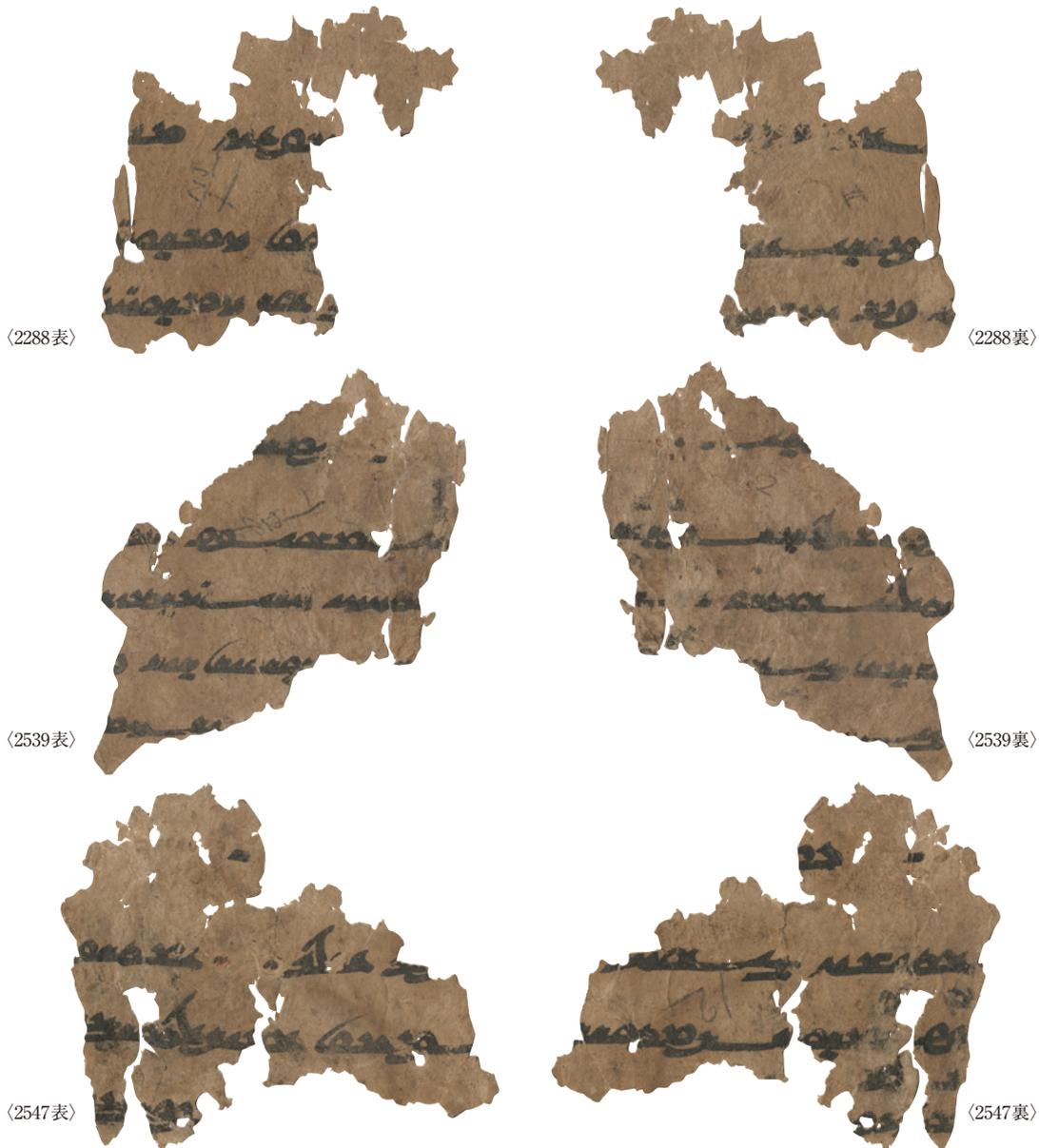
四五回 一二冊 (明末清初)青蓮室主人輯

縦二八・九×横一八・五cm

(講求館蔵) 928.49W.8(1~12)

『後水滸傳』は、『水滸傳』の続編の一つとして作られた明末清初の通俗小説である。作者は、青蓮室主人であるが、生没年などは不詳である。内容は、梁山泊の旧将である燕青が、羅真人の導きによって、公孫勝と共に、同じ梁山泊の旧将で死んだ宋江・盧俊義・呉用たちをそれぞれ転生させ、山寨に集結するが、最後は南宋の武将岳飛の軍隊によって鎮圧される物語である。伝本は極めて少なく、史料的价值を備えている。

一本資料は、西本願寺第二二代宗主大谷光瑞師(一八七六〜一九四八)が満鉄図書館に寄贈した「大谷文庫」の『後水滸傳』を影印したものである。「大谷文庫」は、現在、中国の大連図書館の特色あるコレクションの一つとして収蔵されている。



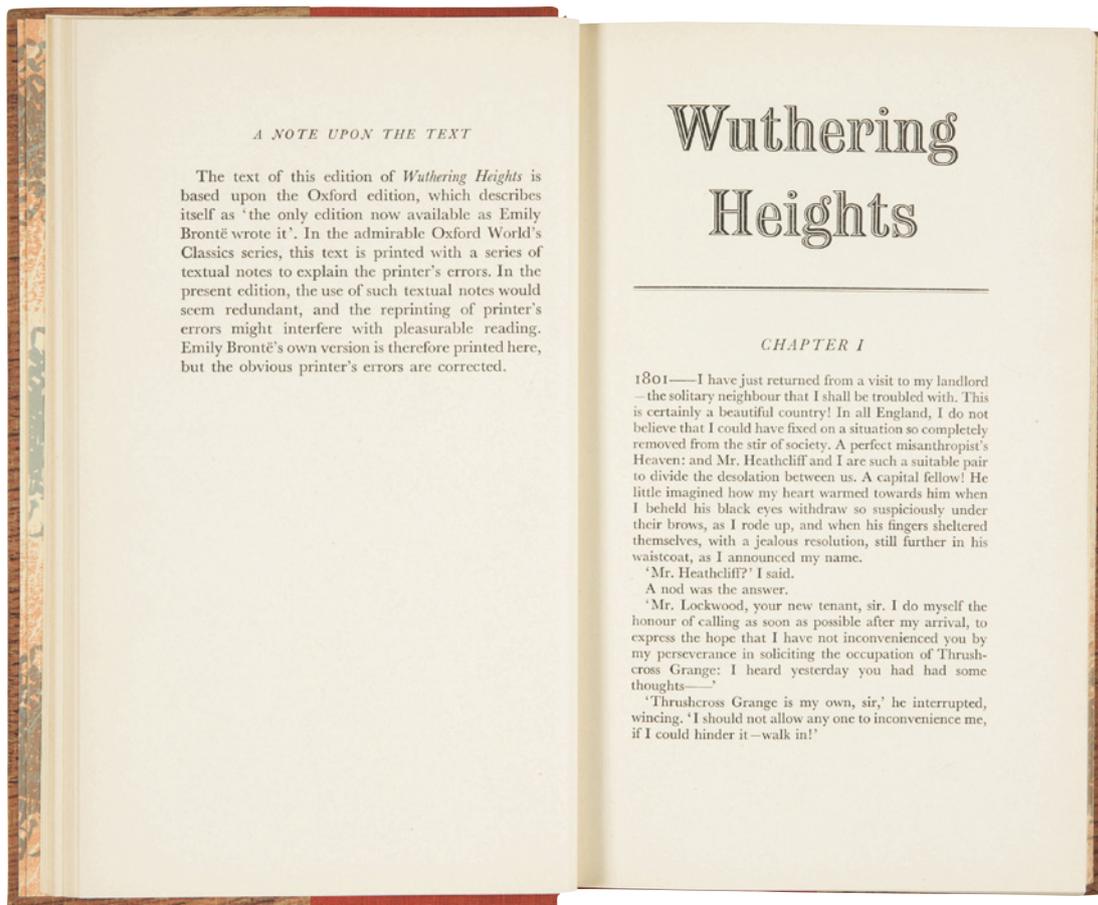
43

## ウイグル語イソップ伝でん

一〇〜一二世紀 トルファン出土 三紙  
 縦七・六×横六・八cm、縦八・八×横九・七cm、  
 縦八・二×横七・一cm  
 (西域 2288, 2539, 2547)

「イソップ伝」は、紀元前六世紀頃に成立したギリシアの動物寓話集『イソップ寓話集』の作者イソップ（ギリシア名アイソポス）の伝記である。イソップは、奴隷の身分から、やがて自由の身となり、リディアの王クロイソスに仕えたことなどの説話が伝えられているが、伝説的な説話が多く、真偽は定かではない。これらの説話を元に紀元前一〇〇〜後二〇〇年に成立したと考えられるのが「イソップ伝」である。処世訓を説いている内容から、「イソップ伝」は、『イソップ寓話集』とともに世界中に広まり、一六世紀後半には、日本にも伝えられた。

本資料は、ウイグル語のマニ教文献であり、マニ教の聖典では、説話が語られた後に、説話に登場する人物や物が、マニ教の教義にたとえられており、「イソップ伝」、『イソップ寓話集』にある説話もマニ教に取り入れられたのである。また、マニ教に取り入れられたことで、「イソップ伝」、『イソップ寓話集』は、中央アジアに伝播することになったのである。



A NOTE UPON THE TEXT

The text of this edition of *Wuthering Heights* is based upon the Oxford edition, which describes itself as 'the only edition now available as Emily Brontë wrote it'. In the admirable Oxford World's Classics series, this text is printed with a series of textual notes to explain the printer's errors. In the present edition, the use of such textual notes would seem redundant, and the reprinting of printer's errors might interfere with pleasurable reading. Emily Brontë's own version is therefore printed here, but the obvious printer's errors are corrected.

# Wuthering Heights

CHAPTER I

1801—I have just returned from a visit to my landlord—the solitary neighbour that I shall be troubled with. This is certainly a beautiful country! In all England, I do not believe that I could have fixed on a situation so completely removed from the stir of society. A perfect misanthropist's Heaven: and Mr. Heathcliff and I are such a suitable pair to divide the desolation between us. A capital fellow! He little imagined how my heart warmed towards him when I beheld his black eyes withdraw so suspiciously under their brows, as I rode up, and when his fingers sheltered themselves, with a jealous resolution, still further in his waistcoat, as I announced my name.

'Mr. Heathcliff?' I said.

A nod was the answer.

'Mr. Lockwood, your new tenant, sir, I do myself the honour of calling as soon as possible after my arrival, to express the hope that I have not inconvenienced you by my perseverance in soliciting the occupation of Thrushcross Grange: I heard yesterday you had had some thoughts—'

'Thrushcross Grange is my own, sir,' he interrupted, wincing. 'I should not allow any one to inconvenience me, if I could hinder it—walk in!'

44

## Wuthering Heights (嵐が丘)

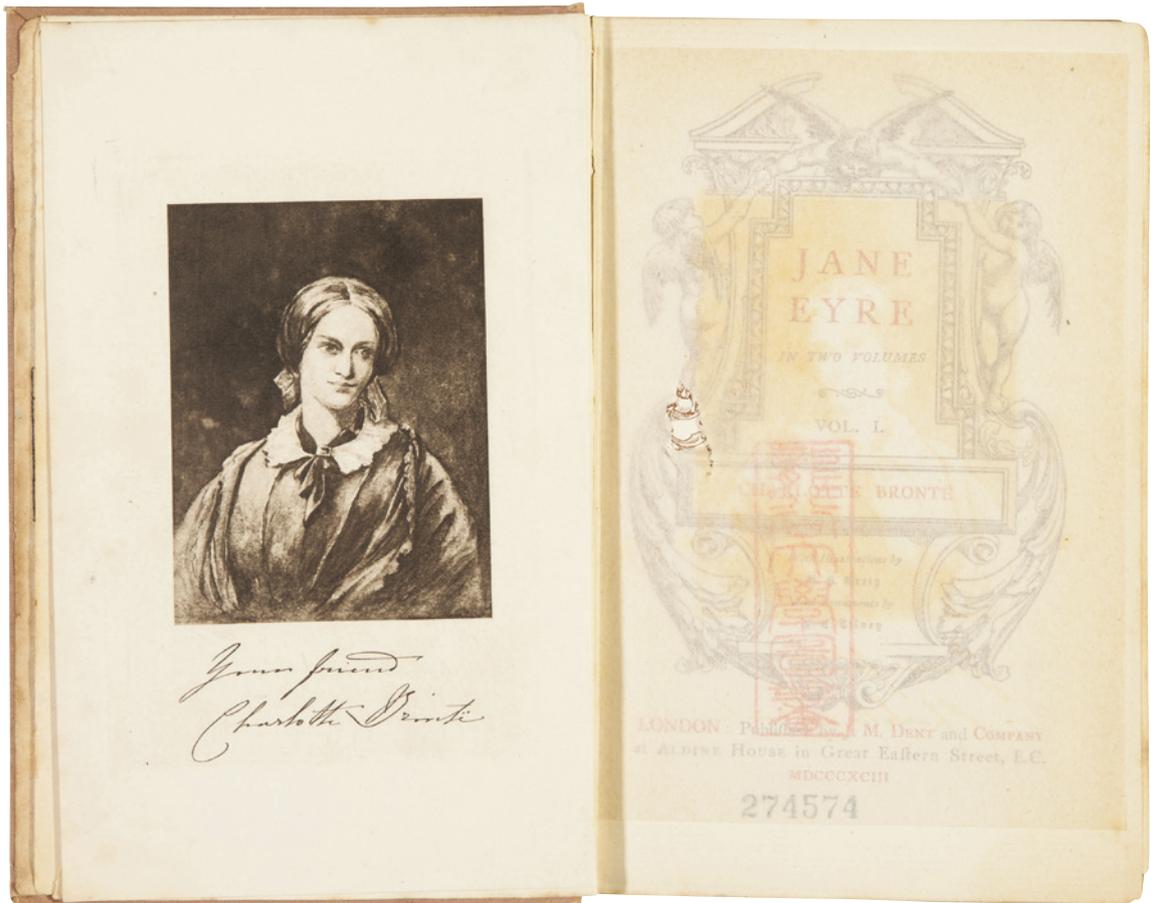
一冊 Emily Brontë 著 一八五〇年刊

縦三三・五横一四・七cm

(講求館蔵 933.53・247.1 フロンテ文庫)

イギリスのヴィクトリア時代を代表する三姉妹の小説家、次女のエミリー・ブロンテが著した唯一の長編小説である。内容は、一八世紀末、中産階級のアンション家に、身寄りのない男児のヒースクリフが引き取られるが、主人のアンション氏が亡くなると、疎外されるようになる。それでも、ヒースクリフはその家の娘キャサリンと恋するが、キャサリンが上流階級のエドガーの求婚を受けてしまい、果たせずに終わる。時が流れ、裕福な紳士となったヒースクリフは、自分を疎外したすべての者に復讐を遂げていく愛憎の物語である。

この作品は、エミリーが二九歳になった一八四七年に刊行されたが、荒々しいインモラルな内容から、評価は厳しかった。エミリーの没後、二〇世紀になると評価が高まり、ヴィクトリア朝の倫理観をはるかに超えた語りの特徴が目され、「世界の三大悲劇」などと評されている。



45

Jane Eyre (メーン・エア)

二冊 Charlotte Brontë 著 一八九三年刊  
縦一七・七×横一一・三cm  
〔請求記号 933.53・1・12 フロンテ文庫〕

ブロンテ三姉妹の長女、シャーロット・ブロンテが著した長編小説である。一八四七年に刊行されたが、当初は、カラー・ベルという男性のペンネームを使用した。内容は、女性主人公のジェーンが孤児として、親類や社会の世話を受け、自由を束縛された状態から、自身の力で自立を求め、やがて貴族のローチェスター氏と結婚に至るまでをジェーン自身の回想の形で語る物語である。

男女平等意識など当時の社会常識から逸脱した行為を描き、特に財産や身分に捉われず、自由恋愛して結婚する点などは、ヴィクトリア朝時代の文学として画期的だった。そのため、新しい女性像を提供した作品として、大きな反響を呼んだ。

## THE TENANT OF WILDFELL HALL

TO J. HALFORD, ESQ.

DEAR HALFORD,

When we were together last, you gave me a very particular and interesting account of the most remarkable occurrences of your early life, previous to our acquaintance; and then you requested a return of confidence from me. Not being in a story-telling humour at the time, I declined, under the plea of having nothing to tell, and the like shuffling excuses, which were regarded as wholly inadmissible by you; for though you instantly turned the conversation, it was with the air of an uncomplaining, but deeply injured man, and your face was overshadowed with a cloud which darkened it to the end of our interview, and, for what I know, darkens it still; for your letters have, ever since, been distinguished by a certain dignified, semi-melancholy stiffness and reserve, that would have been very affecting, if my conscience had accused me of deserving it.

Are you not ashamed, old boy—at your age, and when we have known each other so intimately and so long, and when I have already given you so many proofs of frankness and confidence, and never resented your comparative closeness and taciturnity?—But there it is, I suppose; you are not naturally communicative, and you thought you had done great things, and given an unparalleled proof of friendly confidence on that memorable occasion—which, doubt-

46

### The Tenant of Wildfell Hall

(ワイルドフェル・ホールの住人<sup>じやうじん</sup>)

一冊 Anne Brontë 著 一八四八年刊

縦三三八×横一六・五cm

(請求記号 933.53-304.2 フロンテ文庫)

ブロンテ三姉妹の三女、アン・ブロンテが著した長編小説である。二作目の作品であり、一八四八年にアクトン・ベルという男性のペンネームで発表された。

内容は、全体が青年小地主のギルバート・マーカムの手紙からなる。ギルバートは、ワイルドフェル・ホールの住人であるヘレン・グラハムを愛するようになるが、ヘレンがギルバートの友人であるフレデリック・ローレンスの愛人であるという噂が流れ、ギルバートは、フレデリックを傷つけてしまう。

ヘレンはやむなく隠していた秘密を打ち明けるため、彼女の日記を引き裂いて、ギルバートに渡して読ませる。ギルバートは、ヘレンの日記から、ヘレンが酒や不倫に溺れた夫のアーサー・ハンデントンと別居していることなどを知る。アーサーが落馬による重傷から死去した後、ヘレンを諦められないギルバートは、求愛し結ばれるのである。

## THE PILGRIM'S PROGRESS

IN THE SIMILITUDE OF A

### DREAM

As I walked through the wilderness of this world, I lighted on a certain place where was a den, and laid me down in that place to sleep; and as I slept, I dreamed a dream. I dreamed, and behold, I saw a man clothed with rags standing in a certain place, with his face from his own house, a book in his hand, and a great burden upon his back. I looked, and saw him open the book, and read therein; and, as he read, he wept and trembled; and not being able longer to contain, he brake out with a lamentable cry, saying, "What shall I do?"

In this plight, therefore, he went home, and refrained himself as long as he could, that his wife and children should not perceive his distress; but he could not be silent long, because that his trouble increased. Wherefore at length he brake his mind to his wife and children; and thus he began to talk to them: "O my dear wife," said he, "and you the children of my bowels, I, your dear friend, am in myself undone by reason of a burden that lieth hard upon me. Moreover, I am for certain informed that this our city will be burned with fire from heaven; in which fearful overthrow, both myself, with thee my wife, and you my sweet babes, shall miserably come to ruin, except (the which yet I see not) some way of escape can be found whereby we may be delivered." At this his relations were sore amazed—not for that they believed that what he had said to them was true, but because they thought that some frenzy distemper had got into his head. Therefore, it drawing towards night and they hoping that sleep might

47

## The Pilgrim's Progress (天路歷程)

一冊 John Bunyan 著 一九〇五年刊

縦一九〇×横二二・八cm

(請求記号 933.2BUN)

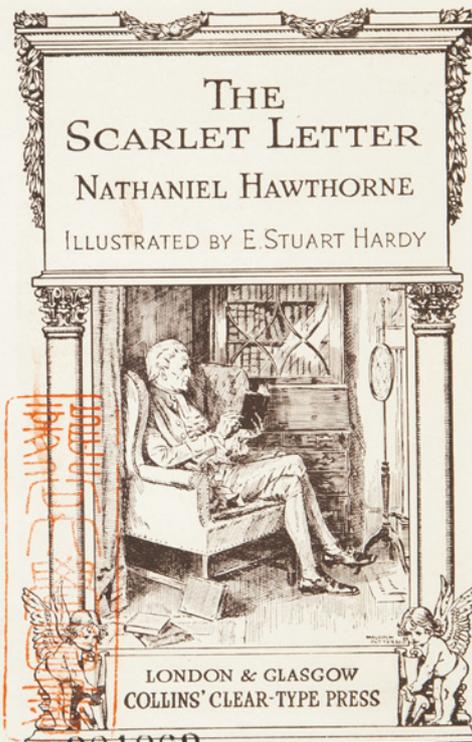
一七世紀イギリスの教役者(協会の指導者)であり、文学者であったジョン・バニヤンによる寓意物語である。二部から成る物語で、第一部が一六七八年、第二部が一六八四年に刊行された。

内容は、筆者の夢物語として語られ、第一部では、クリスチャンという名の主人公が、自分の住む町が火に打たれて壊滅することを書物(聖書)から知る。クリスチャンは重荷(人間の罪)を背負い、町を離れて天の都を目指す。「虚栄の市」などを巡礼し、「世俗の知恵者」、「怠惰」といった名前を持つ人物に出会い、苦難の末、天の都に辿り着く。第二部では、クリスチャンの妻子が、夫の目指した天の都に向かう旅路が語られている。

寓意的、教訓的な内容でありながら、登場人物たちが個性的に描かれており、一八世紀前半に確立するイギリス近代小説の先駆けとして位置づけられている。



S.L. Page 283  
She threw it among the withered leaves.



201962

48

*The Scarlet Letter* (緋文字)

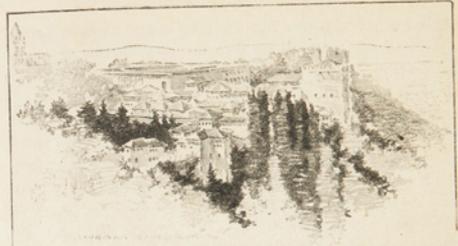
一冊 Nathaniel Hawthorne 著 (一八五〇年刊)  
縦一五・五×横一三・二三  
(請求記号 933.86.1)

一九世紀、アメリカ合衆国の小説家であるナサニエル・ホーソーンによつて、一八五〇年に刊行された小説である。一七世紀ボストンの宗教的戒律の厳しいピューリタン社会が舞台となつていて、罪によつて浮かび上がる人間の魂の諸相が見事に描かれている。

人妻であるヘスター・プリンは、村で尊敬される若き牧師デイズデイルと不義の恋に落ち、娘パールを授かる。不義の罪を咎められたヘスターは、処罰されるが、騒ぎを恐れて、子どもの父親の名を明かすことを拒んだのである。最後にデイズデイルは、ヘスターとパールとともにさらし台に立つて真実を告白して息絶え、罪と人間の悲しみの物語は結末を迎えるのである。



THE GATE OF JUSTICE



## THE ALHAMBRA

### THE JOURNEY

IN THE spring of 1829, the author of this work, whom curiosity had brought into Spain, made a rambling expedition from Seville to Granada in company with a friend, a member of the Russian embassy at Madrid. Accident had thrown us together from distant regions of the globe, and a similarity of taste led us to wander together among the romantic mountains of Andalusia. Should these pages meet his eye, wherever thrown by the duties of his station, whether mingling in the pageantry of courts, or meditating on the truer glories of nature, may they recall the scenes of our adventurous companionship, and with them the recollection of one, in whom neither time nor distance will obliterate the remembrance of his gentleness and worth.

And here, before setting forth, let me indulge in a few previous remarks on Spanish scenery and Spanish travelling.

[ 3 ]

49

## The Tales of Alhambra

(アルハンブラ物語)  
ものがたり

一冊 Washington Irving 著 一九一五年刊

縦一八・八×横一三・一三 cm

(講求記号 939.31-1HV)

アメリカ合衆国で国際的に高く評価された最初の作家、ワシントン・アーヴィングが著したスペインのグラナダにあるアルハンブラ宮殿に関する旅行記・伝説集である。一八二六年から七年ほどスペインに滞在して過ごし、その際に書かれたものである。スペインの過去の文化を魅力的に扱った作品として人気があった。当時、アルハンブラ宮殿は、現在ほど知られた存在ではなかったが、この作品によって、はじめて欧米に広く知られるようになった。

PERSONS REPRESENTED.

Lear, King of Britain.  
 King of France.  
 Duke of Burgundy.  
 Duke of Cornwall.  
 Duke of Albany.  
 Earl of Kent.  
 Earl of Gloster.  
 Edgar, Son to Gloster.  
 Edmund, Bastard Son to Gloster.  
 Curan, a Courtier.  
 Old Man, Tenant to Gloster.  
 Physician.  
 Fool.  
 Oswald, Steward to Goneril.  
 An Officer, employed by Edmund.  
 Gentleman, attendant on Cordelia.  
 A Herald.  
 Servants to Cornwall.

Goneril, } Daughters to Lear.  
 Regan, }  
 Cordelia, }

Knights attending on the King, Officers,  
 Messengers, Soldiers, and Attendants.

SCENE, Britain.

KING LEAR.

ACT I. SCENE I.

A Room of state in King Lear's Palace.

Enter KENT, GLOSTER, and EDMUND.

Kent. I thought, the King had more affected the Duke of Albany, than Cornwall.

Glo. It did always seem so to us: but now, in the division of the kingdom, it appears not which of the Dukes he values most; for equalities are so weigh'd, that curiosity in neither can make choice of either's moiety.

Kent. Is not this your son, my Lord?

Glo. His breeding, Sir, hath been at my charge: I have so often blush'd to acknowledge him, that now I am brazed to it.

Kent. I cannot conceive you.

Glo. Sir, this young fellow's mother could: whereupon she grew round-wombed; and had, indeed, Sir, a son for her cradle, ere she had a husband for her bed. Do you smell a fault?

Kent. I cannot wish the fault undone, the issue of it being so proper.

Glo. But I have, Sir, a son by order of law, some year elder than this, who yet is no dearer in my account: though this knave came somewhat saucily into the world before he was sent for, yet

50

King Lear (リヤ王)

一冊 William Shakespeare 著 一八二六年刊

縦一三五×横九四<sup>三</sup>

(書本記号) 933.23-SHA-19)

イギリスの詩人、劇作家として知られるシェークスピアが作った「四大悲劇」の一つである。一六〇五年頃に執筆された作品とされる。

古代ブリテン王のリアは、三人の娘の内、長女と次女に国を譲り、末娘を誤解して勘当して追放してしまう。やがてリアは、長女、次女に虐待されて国を追い出される。それを知った末娘は、リアに加勢して姉たちと戦うが敗れ、捕虜となり獄死する。助け出されたリアは、末娘の遺体を抱いて、苦悩の末、狂死する。

人間の権力への過信、忘恩、正気と狂気などの問題が、悲劇の中で展開され、四大悲劇中最も壮大な構成の作品として評され、今日まで劇として上演される以外に、映画化やオペラ化がなされている。



龍谷大学大宮図書館 二〇一七年度特別展観

『物語る』

開催期間：二〇一七(平成二九)年一〇月一二日(木)～一〇月二〇日(金)

二〇一七(平成二九)年一〇月

編集 龍谷大学大宮図書館

発行 龍谷大学大宮図書館

〒600-8266 京都市下京区七条通大宮東入大工町一二五―一  
電話(〇七五)三四三―三三二一(代表)

協力 本願寺史料研究所・龍谷ミュージアム

印刷 株式会社 同朋舎  
印刷 同朋舎

龍谷大学図書館では、今回の展示作品(一部を除く)を含め、古典籍をデジタル画像で公開しています。左記のURLからご覧下さい。

<http://www.afc.ryukoku.ac.jp/kicho/top.html>





龍谷大学  
RYUKOKU UNIVERSITY